



自らを見つめ直す時

惑星パルム内にあるレリクスから無事に帰還したギラムは、アリン達に連れられ治療施設へと運ばれて行った。彼の負った傷を完全に治す事が今の彼に与えられた仕事であり、本人は半分不服そうにしながらも大人しく施設での日々を過ごす事となった。

「……………暇だな。」

窓辺からの明かりが温かい部屋に運ばれた彼は、数日間の点滴投与と共に包帯を巻かれ毎日を過ごしていた。身体の筋肉そのものは支障はないためリハビリは簡単に行えるも、まだ彼の体力が完全に戻らない事もあるかすぐには退院出来そうにはない。

ベットでの安静を命じられた毎日は、現場仕事を得意とする彼にとって暇で仕方ないのだ。とはいえ、あまり派手に動く事は禁じられているためなす術もない。

ウィーンツ……

「ギラム、身体はどうだ？」

「？ クラウチ……？」

毎日の退屈な時間に倦怠感を覚えていた頃、彼の部屋に見舞い客が訪れた。やってきたのは彼の上司であるクラウチであり、簡単な見舞いの品を手にとってきた。

「動かなくていいぞ、まだ完治とは言えないんだろ。」

「……すまない。依頼に出向いてこのザマじゃ、リトルウィングの名折れだな。」

「んな畏まってへこむんじゃねえよ。誰が言い出したのかは解らないが、お前さんはいつの間にか『稼ぎ頭』って事になってただけだ。お前さんは、別にそれを望んだわけじゃない。」

「まあ、名がそこそこ広まれば依頼が無い日が来ないとは思ったが…… それ以上は、左程意味合いは無かったからな。」

「あれからもう三年か。早いもんだ。」

手にしていた品を近くのテーブルに置くと、彼はベットサイドに置かれた椅子に腰かけた。彼の居る病室は、普通のベットでは小さい彼の様な患者の寝かせる特別な部屋だ。ましてや彼の様な名のある傭兵を治療するのであれば部屋も良い場所を確保されており、今回の事件もあってか上司直々に部屋を用意したと言っても間違いではない。

現状彼の負っている怪我についてはクラウチも話を聞いており、昔のよしみで上手い具合に事件を終えてもらうよう手はずを取った。しかしそれだけは片付かない事もあるため、こうやって足を運ぶ仕事が増えているのだ。

「……もう、そんなになるのか。フィルと会って仕事を初めて、今に至るまで。」

「そういやお前さん、バリバリ仕事をするって言い出したあの頃から戦闘タイプが前とは違ったままになっているが、そっちは良いのか？」

「ああ……そっか。クラウチは『フォース』の俺を知ってるんだったな。今のままで良い……って言ったら、今は少し迷ってるんだけどな。」

「おっ、珍しいな。お前さんが迷うなんて。」

「うっせっ。」

何時しか職場と呼べる企業に属する様になり、彼は仕事と共にフィルスターとの毎日を過ごす様になった。友人と呼べる相手も少なかった彼にとって嬉しい話し相手であり、家族の様に思える毎日は彼にとっても楽しい時間だ。しかしそれだけでは済まない事態も彼は経験しており、現状に至るまで様々な経緯が存在した。

戦闘タイプを変える前の、自分に対する周りからの目線。その眼と共に得た切欠を力にしようとして、今の自分に向けて鍛錬を行った事。フィルスターとは違う新たな『仲間』と共に、大切な友人を失った。振り返れば思い出しきれぬ程、彼はいろいろな事を経験したのだ。そして、そんな彼の過去を知らない人々も多数存在していた。

「『元に戻しても良いんじゃないのか』って俺からは口にする事は出来ても、お前さんの選ぶ事だ。テクニックを重視する生き方も、今の生き方を続けるもお前さんの自由だ。」

「……」

「だが、俺から言える事もある。」

「えっ？」

そんな過去を知るクラウチは意見を言おうにも言えない事を告げた後、リラックスする様に背を逸らしこう言った。

「後悔のしない、お前らしい生き方は何なのか。お前さんはそれを大切にしている事だけは、俺も解っているつもりだ。そこだけは、間違えないようにするんだな。」

「……」

話を終えクラウチは席を立つと、ギラムの頭を軽く撫でた後その場を後にした。新鮮過ぎる行動に啞然とする彼をよそに、クラウチは一言残し去って行った。

「……後悔のしない、俺らしい生き方……か。……何だろうな。」

部屋を出て行ったクラウチを見送った後、ギラムは再び窓辺に視線をずらし外を見ながら考え事をするのだった。

悟り漂う時

療養生活を送り、ベットでの退屈な日数の経過したある日。

「長らく、お世話になりました。」

「お大事にね。」

施設から退院する許可を貰えたギラムは、早々に身支度を済ませ挨拶をし、施設を後にした。迎えに来ると言い出す相棒二人の協力を断り1人施設を後にすると、彼は自室へと戻る帰路を辿っていた。

「……………」

施設から自室へと向かう際の距離は、転送装置を使えば左程時間のかかる距離では無い。しかし今日の彼はすぐに戻る事を選ばず、別の場所へと移動する装置を起動し、転送された。

彼が転送先に選んだのは賑やかなショッピングモールであり、人気の多い空間。普段の仕事帰りではあまり立ち寄る事のない場所ではあったものの、今日の彼はそんな場所に何か魅かれた様だ。特に買い物をするわけでもなくその場を通り過ぎ、少し長い帰路を選んだようだ。

『……………』

しかし何処か楽しげな雰囲気は無く、今の彼は辺りを軽く見渡すくらいしか行わない。知り合いに捕まる事のないほど話しかけられる事もなく、店の店員からの声掛けもあまりない。まるで彼が『一人のヒト』であるように扱うも、気兼ねなく話しかけられる事も無い。

そこに居るようで、そこに居ない。そんな風に、今の彼は感じていた。

『周りが楽しい所に行けば、少しは気が晴れると思ったんだが……そんな気にもならないな。やっぱ、悩んでるんだろうな。俺。』

店員と楽しげに話す客達の様子を見た後、ギラムは視線を逸らし歩き出した。感覚的に楽しい事を抱きたいと思う自分が居るも、何故かそんな気にはなれない自分が居る。そんな風に抱く彼は、施設内で告げられたある言葉をずっと心に抱いていた。

自分が尽くしてきた行動は、はたして本当に自分が行いたかった事なのか。それが解らないまま退院した事もあり、このまま直帰で部屋には戻りたくなかったのだ。部屋に戻れば待っていてくれる存在がおり、そんな相手に心配をかけてしまう。それが、嫌だったのだ。

「……………何だろうな。この気持ち。」

「ギラムさん。」

「？」

そんな気持ちを抱きながら歩いていると、彼の後方から自身を呼ぶ声が聞こえてきた。声を耳にした彼は後方を見ると、そこにはガーディアンズの制服を来た茶髪の女性が、軽く手を振りながら駆けてくる光景が目に入った。

「ルミア。久しぶりだな。」

「お久しぶりです、ギラムさん。お買い物ですか？」

「あ、ああ…… まあそんな所だ。」

やって来たのは『ルミア・ウェーバー』 ガーディアンズ所属の若き教官であり、英雄と呼ばれる『イーサン・ウェーバー』の妹だ。エミリアとも知り合い以上の親しい友人同士であり、最初は相対する考えを持っていたものの、今ではすっかり親友同士の関係だ。

ギラムとも彼女の繋がりですぐに親しくなり、二人は歩きながら話をし出した。

「ルミアは今日はどうしたんだ。こんな所に。」

「エミリアに呼ばれて来たのは良かったんですが、言い出しの彼女が研究室に連行されていて…… 代わりにクラウチさんからお話を聞いて、今日はその調査のために来ていたんです。」

「調査か。毎度毎度ご苦労さん。」

「いえ、これもガーディアンズとしての命もありますから。お気遣いありがとうございます。ギラムさんは……」

「？」

「……いいえ、なんでもありません。」

珍しい場で遭遇した彼は話をし、彼女が仕事でショッピングモールに居た事を知った。いったいどんな仕事を頼まれたのかと思うも、左程気に止めず互いが置かれている状況を把握する以上の事は、彼もしなかった。また彼女も彼の頭に巻かれている白い包帯が気になったものの、左程深くは追求せず二人は軽めに話をすだけで終わらせていた。

「では、私はこれで。ギラムさん、またお仕事で一緒でしたらよろしくお願いしますね。」

「ああ、こちらこそ。またなルミア。」

しばらく歩き転送装置の近くへ到着すると、ルミアはその場で足を止めその場で別れる事を告げた。彼女からの申し出を聞いた彼はいつも通り挨拶をし別れると、装置の行先を指定し移動しようと準備をしていた。

その時だ。

「ギラムさん！」

「？」

「……私から、何かを言えるほどの経験は無いかもしれませんが。何か協力できることがあったら、おっしゃって下さい！」

彼の様子を見ていたルミアは突如声を張り上げ、何か伝えようと一言彼に伝えた。それを聞いたギラムは少し驚きながらも彼女に手を振り、申し出を聞き入れた様子を見せその場を去った。同じフロア内から彼が居なくなったことを確認すると、ルミアは少しだけ笑顔を浮かべその場を後にした。

その後装置によって転送されたギラムが付いた先、それは普段彼が行動をするリトルウィング支社のある扉前だった。付いた先で辺りを見渡すも知り合いの姿は無い事を確認すると、彼はその場から歩きだし自室へと向かって行く。

『……なるほどな。仕事って、そう言う事か。クラウチの奴、妙な所ばかり人員投入しやが

って。』

社員達の個別マイルームを仕切る大扉を抜け通路を歩きながら、彼はルミアに与えられた仕事は何なのかをなんとなく察していた。恐らくエミリアが呼んだと言うのは口実であり、クラウチ直々に呼び出され自身が寄り道をするであろうことを見越し、あたかも通りそうな場所を読んで彼女を配置した。様子がおかしければ話かけ気分を紛らわせてほしいとか、そう言った依頼で彼女を招集したのだろうと彼は思った。

『……でもまあ、それだけ引きずってる様にも見えるんだろうな。こうなると、即効でフィルに見破られそうだ。』

そんな上司や友人達のさりげない配慮を知り苦笑する中、彼は少しだけ元気が出た様子で自室へと向かって行くのだった。

そばに居る相棒との時

ウィーン

「戻ったぜ、フィル。」

「おっ、主。お帰りー」

医療施設から帰宅したギラムは、自室の扉に掛けたロックを外し中へと入った。部屋には普段と変わらずフィルスターが定位置で仕事をしており、主人の声に反応し顔を出し、出迎えにやって来た。

「随分早かったんだな。リニロの奴は、買い出しに出てるぜ。」

「ちと身体が動かせると思ったら、施設を早く出たくなっちゃってな。無理言って午前中に出してもらったんだ。」

「あんまり無茶すんなよ？ 身体がボロボロになって、ギリギリの生命線だったんだからな。」

「ああ、解ってる。」

帰宅した主人の身体を気遣いながら、フィルスターは先導を取りながらベットサイドへと移動した。そこには主人が普段好んで飲んでいる珈琲を作る機械が設置されており、帰宅後の飲み物を準備するのもフィルスターの仕事だ。

綺麗に洗われセットされていたフィルターに適量の珈琲豆を入れボタンを押すと、豆を轆いた際の香り豊かな匂いが周囲に漂う。先に主人の鼻を楽しませながら彼はせっせと準備を済ませ、あっという間に主人の元に出来立ての珈琲が振る舞われるのだ。

「サンキュー、フィル。」

愛用しているマグカップに注がれた飲み物を受け取り、主人はお礼を言いつつフィルスターの頭を撫でた。喜んでもらえた事を知り嬉しそうな表情を見せる彼を見ながら、ギラムはコーヒーを飲むのだった。

「.....なあ、フィル。」

「んー？」

用意された珈琲に口を付けた後、不意にギラムはフィルスターに声をかけた。突然呼ばれた事にもすぐさま反応し彼は主人の顔を見つつ、使用した器具を片づけていた。

「ちと聞きたい事があるんだが、良いか。」

「おっ、主が俺に質問何て珍しいな。なーんでも聞いてくれっ」

「.....そんな大層な内容じゃないぜ？」

「いいからいいから。主にとってそうでも、俺にとっては大層なもんだからな。主が俺を頼ってくれるなら、万々歳だっ」

声をかけられ要件を聞くと、内容を聞いたフィルスターは嬉しそうに返事を返し、早々に機械を片づけ主人の前へとやって来た。その手際の良さにはギラムも驚きカップを落としそうになるも

、目の前に立つ相棒は瞳を輝かせ、忠犬ならぬ忠龍の如く命令を心待ちにしていた。

しかし呼んだ側からすれば大層な内容では無いため期待をされても困ると言うも、相棒は効く耳を持たず嬉しい気持ちを素直に告げるのだった。そんな相棒の期待にそぐわない事を知りつつも、ギラムは軽く何かを諦めた様子を見せながらも、少し嬉しそうに彼を見た。

「俺の昔の戦闘タイプの事は、覚えてるか。」

「ああ、入社当時の記録は『フォース』だったな。今は『ブレイバー』だけだ。」

「その時の俺の事、フィルはどう思った？」

「どうって言われても…… 元々こういう自覚が芽生えたのって後々の事だから、その時は対した事は思わなかったな。ビーストの青年で、テクニク職の主人なんだってくらい。」

「じゃあ、仮に今のフィルでその時の俺を見たら。どう思った？」

「んー 異例だなーって言うのも思っただろうし、でも何か理由があるんだろうなーってのも、思ったかもな。今じゃいろいろ知っちまってるから、それ以上は無理。」

「そっか。」

彼がした質問、それは自身の昔の戦闘タイプの話だった。

リトルウィングに所属する前、彼はフリーの傭兵として行動しており、その時からある職業にこだわり仕事をこなしていた。自身で用意出来る範囲、可能な範囲で学んだ事を実践で生かすべく、やってくる数少ない依頼には必ず参加をしていた。その際パーティを組む事になった他の傭兵達とも様々なやり取りを交わしており、友人とまで言えるほどの仲ではないが、様々な事を学ぶ機会もあった。

そんな彼は現在勤めている会社の上司に拾われ、半ば強制ではあるが『居ないよりはマシなパートナー』と名称づけられたある少女と行動を共にしていた。少女と居る時にも自身の戦闘タイプは変えず行動をしていたが、ある事件を切欠に彼は今の戦闘タイプである『ブレイバー』に職業を変更した。その頃から彼の業績が認められる事がしばしばあったため過去を知る者は少なく、生活の際時間を共有する事の多いフィルスターと、上司のクラウチとゆかりのある仲間達しかその事を知らないのだ。

「……でもどうしたんだ？ 急に過去の職業の話を引き張り出すなんて。」

「まあ、ちょっとな。……」

「みずくせーぞ主。俺には何でも話してくれるって約束だろー？ 出来る事は……まあ限られてっけど、俺は主に尽くしたいんだからな！」

突然振られた話題に、フィルスターは首を傾げながら主人を見ていた。過去を振り返る事がゼロでは無い人間の世話役をしている彼ではあるが、彼から見てもギラムは今までに例のない主人と言っても過言ではないほどの異例の主人。そんな彼が過去を振り返る時は大抵訳があり、今回もまたそのパターンではないかと彼も予測をしている。そのためか、少し強引に主人の膝を昇り顔を近づける辺り、見抜いているが故の真剣な眼差しを見せるのだ。

しかしドアップで機械龍が自身の身体をよじ登るとなると、遣られた側からすれば怯まずにはいられない迫力である。

「分かった分かった。顔近い……」

「ほんとかー？ 嘘ついたら、俺も怒るからな？」

「へいへい。……ったく、これじゃあどっちが主人か解らないな。」

「言われてみれば、そうだなっ 俺もマシナリーじゃねえみたい。」

気付けば立場が逆転していそうなほど、彼等はすでにただの主人と補助役の機械ではない。話したい時には会話をし、依頼をする際相棒を頼らずして依頼をしない程、固定のパーティともなっている。互いが出来る事をすでに把握し役割分担をするほど、ギラムはフィルスターの事を信用しているのだ。

どんなに無礼にも感じる事をされたとしても、それは相棒が自らを1人の人格として見た反応を示しており、それ以上でもそれ以下でもない。彼はもうマシナリーではない、立派な一体のキャストなのだ。それを知るたびに、二人は苦笑し他愛もない会話に表情を変えるのだった。

「でも、主が昔の事を気にするなんてな。あれからもう吹っ切れたと思ってたけど、やっぱアレで何か引っかかっているのか？」

「ちっとな。昔を隠して今のスタイルが出来ていた矢先、味方を襲うなんてしゃれにならない真似をしちまった。それで皆を困惑させたり悩ませたりしたのも事実だから、半ば嘘を付いてる自分がどうなんだろうなって、思ってるんだ。」

「言うほど嘘でもねーけどな～ 現に主は『ハンドガン』も『ツインダガー』も使うし、ロッドじゃなくても『ウォンド』も使ってる。仮にフォースでもそうだっただろ？」

「まあ、そうかもな。……でも、俺は現にパーティメンバーに嘘はついてるだろ。本当は援護をする事が得意なのに、俺は前線に立って戦ってるんだ。フィルにその辺は、ぜーんぶ任せてる。」

「俺は主の援護しかできねーからな。そう言うと、あながちリニ口の言った主のスタイルは間違いじゃないな。主は確かに、前線には左程興味は無い。」

「そういうことだ。」

軽く苦笑し笑いあった後、二人は並んでベットサイドに座り話をしていた。唐突に話された昔の事に困惑したのも束の間、フィルスターはギラムの話に耳を傾け、自身なりに考えた回答を話した。

基本的な戦闘の体系として立ち回る都合上、種族に見合い自身に合った戦闘タイプを選ぶ事が基本とされている。前線が得意な種族であればハンターとなって盾となり、援護が得意な種族であればフォースとなって皆を助け、射撃が得意な種族であればレンジャーとなって隙を作る事が基本だ。そこから自身の長所を生かす戦闘スタイルが個々で生まれ修行を積み、今の実績となって反映される事も少なくない。

しかし彼の場合種族上『ハンター』が良いとされる中、それとは正反対の『フォース』となり援護を行っていた。体質上専門職に比べれば打たれ強いものの、長所となる腕力を生かす事はまずない。ゆえに、何故そんな異例な行動を取ろうとするのか、初見の傭兵達からすれば疑問を抱かずにはいられない程、彼は異例で仕方がないのだ。だがそんな主人でも人には変わりなく、悩むときは悩むため、親しい間柄でもあるフィルスターは、真剣に話しを聞き返事を返しているのだ

。

こういう時の彼の発言には、普段の漂々としたお気楽思考は一切無い。

「そういや、昔はそんな事があったな。彼女は今じゃ全然気にしてない上に、アレは夢の出来事とされてたしな。」

「今でも詳しく知ってるのは、俺自身とフィルだけだ。……ってか、彼女じゃねえって言うてんだろ。」

「へいへーい。」

とはいえ一通りの話が終わればいつもの彼であり、主人を弄り主人からの軽い仕置きが飛んでくる。だが手痛い手刀とは違い今回は頭を掴んだままの撫でまわしであり、言うほど怒っていない事はフィルスターも解っている。心のバランスを見た上での反応のため、フィルスターは詫びる事はせず主人の好きにされるのだった。

「そういえば、あんまり詳しく知らないな。種族上主が一番得意とされるハンターではなく、何でフォースをやっていたのか。」

「なんだ、知りたいのか？ フィル。」

「ちょっとな。アイツよりも、主の事をたくさん知っておきたいだけだ。」

「へえ、主人に熱心なんだな。フィルは。」

頭を掴まれたまま、フィルスターはふと初め以来気にする事を止めていたある疑問をぶつけてみた。異例過ぎる主人の行動には理由があった事を知っている今、フィルスターはその時登録していた戦闘職に主人は理由があって登録をしていた事を理解している。だが根本的な理由そのものは彼も知らず、昔話をあまりする事のないギラムのため周りすら知らない内緒の事実に過ぎない。

軽く教えてくれると嬉しいと言うと、形勢逆転とばかりにギラムはフィルスターを弄った。

「うっせっ……！」

還されたとばかりのその言葉を聞いて、フィルスターは少し顔を赤くしつつ照れていた。素直な反応を見せる相棒を見たギラムは、笑顔になりながら彼の頭を離し優しく頭を撫で、彼の反応を見て遊んでいた。撫でるたびに俯き顔を赤くする所を見ると、内心嬉しいが表には出さないとと言う彼らしい反応だ。

これこそツンデレであろうと思えるほど、可愛い返事をするのだった。

ウィーンッ

「あ、主！ 今日が退院って当たりだったんだね！」

相棒の可愛い一面を堪能していると、不意に彼等の居る部屋の扉が開いた。やって来たのはもう一人の相棒であるリニログーンであり、部屋に入るや否や主人を見つけ嬉しそうに駆け寄って来た。手には大量の食品が入った紙袋を持っており、退院が待ち遠しくてたまらない買物ぶりである。

「リニロ、ただいま。」

駆け寄って来たリニログーンに対しギラムは返事を返すと、持っていた紙袋を受け取り何が入っているのかと中を見た。中には普段彼が飲用している珈琲豆や水が入っており、新鮮な野菜や加工食品の数々。比較的調理に手間がかからない物を中心として購入してきた様だが、栄養面を考えてなのかバランス栄養食も入っている。

他には洗剤等々の日用品も入っており、とても一袋に収まるのかさえ解らない量が詰まっていた。

「随分遅かったな。混んでたのか？」

帰宅に少々時間が掛かっていたのか、フィルスターは自身に内蔵してあった時計を見つつ質問をし出した。買い出しそのものへかかる移動時間は、基本的に彼等の生活には皆無と言っても良いほど、楽な移動手段が備わっている。ショッピングモールそのものの店舗数は膨大とはいえ、食料品限定となれば行く場所は限られており、購入手続きをするのにも基本的に主人の名義カードがあれば即終了だ。

なので、彼は道草を食っていたと思った様だ。

「主が今日帰ってくると思うと早く戻りたかったんですが。何を食べさせてあげようかと考えると、いろいろ悩んでしまっ。」

「ふーん、そっか。まあいいけど。」

「……あ、フィル。もしかして、主と自分の知らない話をしましたか？」

しかし実際にはそうではない様子で、買う物に迷いがあった事をリニログーンは報告した。買い出しメモが存在しない主人の買い物は自身で決める事を義務付けられており、大好きな主人の為となれば彼等も必死になって考えるのは当たり前だ。ましてやこの場に存在する二体の主人愛は相当な物であり、ちょっとやそっとの広告では微動だにしないだろう。

そんな買い物の報告をし終わると、何かを察したのかリニログーンはフィルスターとギラムを見比べ、主人の足にくっ付いた。

「何でだよ。俺の主なんだから、別にどんな話をしたっていいだろ。」

「やっぱり当たりか。でも今は自分の主でもあるんだ、抜け駆けは許しませんよ。」

その後彼の推測が事実である事を知ると、彼の行動は迅速なものに切り替わった。足にくっ付いていたリニログーンは即座に主人の膝元へと移動し、軽く開かれていた両足の間を大きい身体で

橋渡りするようにうつ伏せになる。両手両足はしっかりと主人の腿の上に乗っており、軽く顔を腿にこすり付けていた。何を示すのかは解らないこの行動だが、簡単に言えば『マーキング』と似たような行動と言える。

匂いそのものは無いものの膝に顔を寄せ、お気に入りの場所を大きい身体で占領し、飼い竜である服従心から背中を見せ無防備さをアピールする。普通に考えれば乗られた側は重くて退かしたくなるのだが、ギラムからすればよくある事らしく基本的に翼以外は邪魔では無いらしい。リニログーンの場合はうつ伏せで膝を占領し、フィルスターの場合は膝に跨る様に乗るのが好きなのだとか。

「あ！ コラ！！ 退けよ！！」

「お気に入りの場所は早い者勝ちだぜー フィルスター」

迅速かつ敵対心のあるリニログーンの行動を目にし、フィルスターは慌ててリニログーンをギラムの膝元から退かそうと取り掛かった。だがすでにリニログーンはギラムの服にしっかりとしがみ付いており、簡単には剥がれない。

「主が座ってる状態の俺の特等席を取るな！！ 後輩は先輩に譲れって！」

「後輩には優しくしろよなー 先輩ー」

フィルスターの発言も空しいまま聞き流され、リニログーンは上手に逆手にとって言葉でも負けじと反論していた。もはや先輩後輩関係のやり取り以前に、単なる領土の奪い合いをする双龍でしかない。軽く唸りながら攻防戦を繰り広げる所が、またケモノらしい。

「退けええいっ！」

「断るっ！！」

「……ハハッ」

そんな二人のやり取りの最中、彼等の上方から苦笑する声が聞こえてきた。突然やってきた笑い声を耳にした二体は上を向くと、そこには肩を震わせ笑っているギラムの姿があった。

「何が可笑しいんだよ、主ー」

「俺等は必死なんですよ。」

主人が苦笑しているのを見て、フィルスターとリニログーンは少々噛み付くように反論した。しかしギラムは軽く詫げる発言を口にするも、笑いだけは収まらない様子で腹を抱えて笑っていた。いったい何がおかしいのだろうか二体は顔を見合わせ不思議そうな顔をするも、再び見上げた主人の顔を見て彼等に異変が現れた。

「……ハハハ。」

「ハハハハッ」

「アハハハ………！」

やり取りを目にした主人が笑い、それを再度見たフィルスターとリニログーンにも笑い移ったかのように、共に苦笑しだした。そして徐々に声量が大きくなりだし、部屋で起こった笑いの波は収まらず、しばしの間笑い声が続くのであった。

「……はあー 笑った笑った。」

しばし続いていた笑いの波が引き出すと、ギラムを含む三人はベットの上で身体を休めていた。何時しか膝上の占領は引き分けとなったのか、今では両サイドに二体がそれぞれ腰を下ろしていた。

「本当、あんなに笑ったの何時振りなんだろう。」

たくさん笑って気分が良くなったのか、リニログーンは軽く過去を思い出しながら呟いた。彼にも語れるだけの過去は存在するものの、あまり良い思い出は無いため自ら語る事は無い。ほんの呟き混じりの先の発言にもそれは言えるため、今の暮らしが何よりも嬉しい証拠と言える。

「そんなに無かったのか？」

「ギラムみたいに、優しくて俺を認めてくれる主は居なかったからさ。それが普通だったんだ。」

「そっか。お前も寂しかったんだな。」

呟き混じりな発言に対しギラムは質問すると、リニログーンは首を縦に振りそう言った。寂しげに話し笑顔を見せるリニログーンは少し健気であり、ギラムは彼の後ろ首から腕を回し、優しく頭を撫でて出した。優しい撫でを受けたリニログーンは嬉しそうな表情を見せており、とても懐いているのが解る。

「で、リニロにも言うのか？ 昔の事。」

そんな二人を見て少々ヤキモチを妬いたのか、フィルスターは不貞腐れながら質問した。事を振り返れば元々主人の『昔話をする』事がメインであり、何時しか特等席の強奪戦が勃発したに過ぎない。問題は半ば二体にあるものの、聞きたい話は同じなのだ。

「ああ、もうココに住む大切な存在だからな。一緒に聞いてくれるか？」

「何をですか？ 主。」

「俺の過去の話。今のプレイヤータイプになる前、小さい頃の話さ。」

「主の昔話？ 聞きたい！」

突如始まったやり取りに首を傾げるも、リニログーンは説明を受けた途端表情を一変させた。まるで待ち遠しかったご褒美を貰える子供の様な笑顔を見せており、そそくさと移動を開始しフィルスターの横に席を移した。

そんなもう一人のパートナーマシナリーを見たフィルスターは、大人しく彼が座れるだけのスペースを確保し、隣同士でギラムの顔を見た。

「飲み物もOK。いつでもいいぜ、主。」

すでに用意してあったコーヒーマーカーを指差しつつ、フィルスターは話を開始するよう促した。今か今かと見せる二体の瞳は爛々と輝いており、期待以上の話が出来ないと言った事を忘れていたかのような眼差しだ。軽く相棒達の眼差し攻撃に怯むも、ギラムは肩を竦めた後話を開始しようと彼等の顔を見た後、奥の窓から外を見るように過去を見つめだした。

「アレはリトルウィングに入る前、エミリアとレリクスに閉じ込められるもっと前。小さい頃の話だ。」

ギラムはそう言いつつ、話を始めた。

安らぎと夢見た時

それは、俺がまだリトルウィングの傭兵になる前の話。丁度、後の実験体脱走事件に関わったナヴァルと関わっていた頃の話だ……

俺が生まれたのは、惑星モトゥブの砂漠地帯から少し外れた荒地。ローグスとはあまり関係を持たない小さな村で、俺は生まれ育った。その家は俺を含めた三人の家族の家で、貧富の差とかは関係のない周りと同様な位置。小さくも暖かいビーストの家に生まれた、金髪に蒼い瞳の、元気な少年だった。

俺の少年時代は結構やんちゃな方だったが、学業をそれなりにこなして、遊ぶことがなによりも大好き。小さな村と言っても食事に困る事は無くて、両親の元ですくすくと元気に育って行った。兄弟はいなかったが、俺は特にその事は気にしていなかったぜ。

後の事件に関わるナヴァルと出会ったのは、俺が九才から十才になる誕生日の日だった。

いつも通りの、平和な日常を過ごしていた。その日は教育日が休みの日であり、特に予定の無かった俺は、一人で木々の多い場所で遊んでいた。木登りをしたり、砂の大地にイタズラ書きをしたり、適当に生えている植物を食べてた。今更思うと、結構俺って怖いもの知らずだったのかもしれないな。今なら好きな物も食べれるし不味い食べ物も知ってるから、本当に警戒心が無かったんだなって思ったぜ。

「……ん？」

そんな日のお昼前、俺は遊んでいた場所の茂みに何かが居る事に気が付いた。気配って言うか、茂みの音に引かれた俺は何がいるのか確かめたくて、何も気にする事無く茂みに近づき、奥を見た。そこには誰かが仕掛けたであろう罠に引っかかった、薄いクリーム色の身体をした、珍しい色のナヴァルが居たんだ。

「シャー……」

「可哀想、誰がこんな酷い事を……」

罠にかかって出られないナヴァルを見た俺は、持っていた木の棒を捨てて解除に向かったんだ。幸い小さい頃の俺でも簡単に解除できる奴だったから、俺でも外へ出してあげられるって思ったんだが、少し読みが甘かった。

「！！ シャーッ！！」

近づいた俺に気付いたナヴァルは、罠にかかったまま俺に対して威嚇をした。相手との距離も近くて、威嚇の威圧感に圧倒された俺は不意に足が竦んで、そのまま身体が後方に行こうとするも、バランスを崩した。そのまま尻餅をつく様に後方へ倒れた俺は、転んだ拍子に気持ちがりセットされて、左程怯む事無くそのまま四つん這いに這って罠に触れた。

「……イテテ。大丈夫か？」

〔シャーッ！！〕

それでもナヴァルは威嚇を止めないで、足が動けばそのまま俺に襲ってくる勢いで鳴いていた。真近で見た原生生物は小型でも迫力はあったし、大きな口を開けるたびに唾液らしい液体が牙に沿って流れてて、何とも不気味だった。でも俺は手だけは一生懸命に動かして、罨を解除する事が出来たんだ。

掴まっている相手が、悲しそうな鳴き声を上げていた気がした。その一心だったんだろうな、きっと。軽く興奮しているナヴァルをよそに、俺は罨を解除し中から出してあげられるように出て来た。罨から足が抜けたナヴァルは軽く驚いて左右を見渡していたけど、その瞬間だ。

「よし。大丈夫」

〔シャーッ！〕

ドンッ！

「うわっ！」

ナヴァルからの強力なボディタックルを受けた俺は、軽く後方に押し飛ばされ再び仰向けに倒れた。倒れた相手を見たナヴァルは俺の身体の上に乗って、大きな足で地団駄を踏むように腹の上で暴れてた。

「わわわっ！ お、落ち着けっ！！」

〔シャー！〕

俺が何を言ってもナヴァルは行動を止めなくて、ただ気分を鎮めるために両足を一生懸命動かしてたんだと思う。身体の上で暴れられてたけど言うほど痛みはなくて、ただ重みが何度も何度も身体に来たって感覚だった。何がしたかったのかも、俺にも解らなかった。

でも、相手を倒そうとっていうのとはまた違ったもののようにも、感じたんだ。

〔シャーッ……………〕

しばらく足踏みをした後、ナヴァルは落ち着いたのか、俺の上から跳び降りた。下りた拍子に大きな尻尾が顔面すれすれに通り過ぎた時には胆を冷やしたが、それ以上は相手も何もしなかった。

「……ハア、ビックリした。」

ナヴァルの重量感から解放された俺はゆっくり起き上がって、飛び降りたナヴァルを見た。でもすでに前方の遠くを走っていて、しばらくした後にはもう姿を消していたんだ。

「…………… 行っちゃったな。」

嵐の如く走り去っていたナヴァルを見送った俺は、その場を立ち上がって砂埃を落とした。その時に来ていたシャツに付いた幾多の足跡を見た時、少し項垂れた。

「母さんに、怒られるな……………」

軽く叩いても落ちない足跡は、俺からしたら軽い恐怖の芽生えでもあった。問題児って訳じゃなかったんだが、やんちゃが過ぎて洋服を駄目にする事は結構あってな。そのたびに母親は軽く

俺を叱って、そのたびに綺麗に洗濯して俺に用意してくれた。

今考えると、本当に物を大事にしていなかったのかもしれないな。そこにある物は自分のモノで、どういう風に扱っても良い。でも実際はそうじゃなくて、誰かの毎日の苦勞があって、そこに変わらずにあるだけなんだって。そう思ったんだ。

〔.....〕

後から聞いた話だと、俺が項垂れながら帰って行く姿を、ナヴァルは森の隅で見てたんだとさ。罨から助けてくれた俺に少し興味が沸いたとか、言ってたな。

「.....ただいまー」

遊び場所から帰ってきた俺は、そのまま家に直帰した。足跡だらけの状態ですら村をうろつく気にもなれなかったし、何より事態を後回しにする事が怖くてな。怒られるなら早めがいいって思って、家の扉を開けて中に入って、母さんを探した。

「お帰りなさいギラム。.....あら、どうしたの？ そのお腹の足跡。」

「あっ、えっと.....」

母さんはキッチンからすぐに顔を出してくれて、俺の洋服を見てすぐに質問をしてきた。俺の心配していた読みは的中したし、俺も言い訳をどうしようかと考えたんだが、諦めて素直にこう答えた。

「ちょっと、小型の原生生物に襲われて..... 罨に掛かってたのを助けてあげたら、お腹の上で足踏みされました。.....ハイ。」

「原生生物に？ だ、大丈夫なの？」

「うん。俺より小さい原生生物だったから、怪我は無いよ。あの子は、どっか行っちゃった。」
返答に対し母さんは無論動揺していたけど、俺の無事を確認したらすぐに安心した表情を見せてくれた。てっきり怒られると思ってた俺には意外な顔だったけど、怒られるよりは良いかと思っ
て、それ以上は考えなかった。子供が原生生物に襲われて、そのまま命を落とす事は何処にでも
ある話。ましてや近くに対応できる大人がいない状況で無事に帰ってこれた事は、何よりも幸
運だったんだって今は思うぜ。

普通に出かけた子供が返ってこないって話は、何処でも聞く話だからさ。

「一応、大事は無さそうね。でも怪我とかあったら困るから、奥で手当てしてあげるわ。いら
っしゃい。」

「はい。」

そのままシャツの洗濯をするって言って、母さんは俺からシャツを回収して洗濯機に放り込んだ。それと同時に俺の身体に怪我が無い事を確認する前になって、部屋の奥にある椅子の上に座らせた。そのまま何をするのかと思って母さんを見ていると、棚にしまっていたウォンドを持ってこっちに来た。

持ってきたのは、ヨウメイ社製品の模造品として当時出回っていた『コメツタラック』

「癒しの力よ、この子に傷があるのなら、癒して下さい.....」

母さんが呟く様にそう言うと、短杖の先端からフォトンが光りだして、俺の身体を少しずつ光が癒して行ってくれた。同時に軽い疲労感も消し飛ぶような感覚がやってきて、転んだ際の擦り傷さえも見る見るうちに消していった。

「うわああ……！ 母さん、凄いな！」

綺麗になった自分の体を見て、俺は母さんが行った事に対して大喜びした。テクニックそのものを見るのはその時が初めてだったし、父親はそういうのとは無縁の行動をする事が多かったから、本当に驚いたんだ。この世界にそんなものが存在して、母さんがそれを行えるんだって。

「フッフ、コレくらいは出来ても不思議じゃないのよ、ギラム。」

「そうなのか？」

驚きのあまり眼を輝かせていた俺に対して、母さんは苦笑しながらそう言った。棚に戻そうとしていた短杖をもう一度俺に見せてくれて、今は何の変哲もない道具なんだって言うのも解った。その道具があって、母さんの実力で行った事。それが本当にビックリで、とても魅力的に見えたんだ。

「誰でもテクニックは使えるわ。ビーストは苦手ってされてるけど、私はこうして使えるわ。」

「そうなんだ……… 凄いなあ、母さんは。」

「ギラムも、大きくなったら出来るわよ。なんたって、私の子供なんだから。」

「うん！ 楽しみ！！」

初めて母親に純粋な褒め言葉を言った気がしたけど、その時は左程俺も恥ずかしい気持ちなんて無かった。今じゃ面と向かって褒めるなんて出来ねえけど、母さんは俺の喜ぶ姿が嬉しかったんだってさ。

いつも洋服を汚すくらいたくさん遊んでいた子が、ほんの些細な事で喜んだから。日常とは違った事を見つけて、その後に行った言葉が何よりも嬉しかったんだって。

「俺。大きくなったら、母さんみたいにいろんな人を助ける事をしたい……！ 俺、頑張るからっ！」

「偉いわ、ギラム。」

キラキラと目を輝かせながら話す俺を見て、母さんは優しく頭を撫でてくれた。夢を持った俺は本当に無邪気で、その日は日が暮れるまでずっとその話を周りにしまくってた。村の人々からしたら当たり前らしい事を嬉しそうに話すから、大人達は口をそろえて子供相手に良い返事をいつも返してくれた。だからこそ俺はその事が本当に嬉しくて、夢を実際に叶えてみたい気持ちが抑えきれないくらいに膨れ上がったんだ。

本当に叶えたい夢を、その時に見つけられたからって。その時までは、無邪気に信じてたんだ。誰もがその行動を、認めてくれるってな。

突き付けられた現実の時

無垢な俺の夢が認められない事を知ったのは、その日の誕生祝いが終わった後。家族三人で集まった食卓で、現実には俺に突き付けられた。

フーーツ……………

「おめでとう、ギラム。」

「おめでとう。」

母親と父親からの喜びの声を受けながら、俺はバースデーケーキのろうそくを消した。一息で消えた灯火と共にやって来た闇は、後から付けた室内灯によって瞬時に書き消される。電気を付けた空間には、ロウソクの消えたケーキと共に綺麗な箱が置かれていた。

「誕生日プレゼントだ。」

箱を目視した俺に対し父親はそう言って、少しぶっきらぼうな笑顔をと共に箱を押した。それを見た俺は自分へのプレゼントだと認識して、嬉しそうに受け取りその場で開けて良いか聞いて、紙包みを破いた。

綺麗な包装紙で包まれた箱を破く中、母親が丁寧に開ける様指摘する声も聞こえた。でも、そんな俺に対し父親は否定することなく、その光景をただ静かに見ていたんだ。

「うわあ……！！」

紙包みを破き箱の蓋を開けると、中には二口(ふり)の小剣が入っていた。紫と青色のグラデーション掛かった小剣は、表現する事の難しい色合いだと言うのが第一印象だった。だがそれ以上に、普段父親が手にする小剣とはまた違ったデザインと言うのが、とても驚く代物だった。

「ツインダガーだ！ お父さんがよく使ってる。」

一体何と言う武器なのかさえ分からないそれを見た俺は、父親に対し何なのかを質問した。だが特に説明は無く、父親は中に入っていた小剣を指さし、俺にこう言った。

「丁度新しい品が入ったから、早めに買い取ったんだ。ギラム、好きに使いなさい。」

「ありがとう！ 父さん！」

誕生日プレゼントとして受け取った武器を手にして、俺は部屋の中で無邪気に振る仕草を披露した。実際に原生生物を相手にした事のない昔の俺からしたら、それはただ父親の真似事をする光景でしかない。

俺の父親は今の俺と同じ傭兵で、リトルウィングほど名の知れた場所では無い小さい場所に所属していた。惑星間を移動するほどの仕事は無くても、俺の住む場所を守るだけの力を持った組織で、俺は時々襲ってきた原生生物と戦う父親の後姿を見ていたつもりだ。たぶん父親もそんな俺の事を知っていたから、その時の誕生日プレゼントとしては高かった双小剣を用意してくれたんだと思う。

「ちょっと貴方。子供にあんな危ないものを持たせちゃ駄目よ。」

「いいじゃないか、ギラムもそんな年頃だ。それに、ほら。」

母親からの指摘をよそに、父親は俺の様子を指で見る様促していたらしい。無邪気に父親を真似るように、俺はツインダガーを振っている姿は父親そのもので、経験は浅くともすぐに実力を付けて行きそうな、そんな姿だと父親も言ってたんだとさ。

「いいセンスをしている。振り方が俺にそっくりだ。」

「貴方の子ね…………… 物心付く前から、貴方を見ていたんですもの。」

嬉しそうにする父親をよそに、母親は少し寂しそうに俺を見たらしい。あの時の両親は、どういう心境で俺の事を見ていたのかは詳しく分からない。父親が何かを期待する様に武器を送った事も、その武器を貰った俺の行動を見た母親の事も。俺は詳しく知らないし、当時の事はなるべく思い出したくないと思ってたんだ。

「ギラムは、大きくなったら何になりたいんだ？」

父親からその時質問された事に対し、俺は素直に返事を返した。それこそが、俺の初めての屈辱だったと、今でも思う。

「俺。母さんみたいに、テクニックを使っているいろんな人を助ける事をしたいんだ。いろんなテクニックを覚えて、お仕事をするんだ！」

俺はその時、俺自身の期待の返事が父親からも貰えると思っていたんだ。父親は俺の住む環境を守ってくれる傭兵であって、俺の目指す姿の一つにも当てはまる、立派な父親だ。ビーストである種族を生かした接近戦は眼を見張るものもあったし、何より恐れなくて相手の懐に入り込む度胸が、何よりも凄いと思っていた。

今の俺でも、よほどの体格差のある相手にはさすがに躊躇する事もあるし、とても真似できない部分もあるからこそ、尊敬できる人物だった。だからこそ、俺の夢を聞いて欲しかったんだ。ビーストである俺でも、父親の様に果敢に戦い、周りを助けられる人物になりたいって。

でも、

バンッ！

「ッ！！」

現実はその甘くは無くて、返事と共にやって来た音に俺は目を瞑り、前を見た。そこには机を思いきり叩いた父親の立ち姿があって、顔はいつもとは違う怖くて険しい表情をしていた記憶があるくらい、俺は父親の事を『怖い』と思ったんだ。

「何を馬鹿な事を言っているんだ！！ お前は立派な俺の息子、傭兵の子だ！ それをなんだ、お前はビーストにあるまじきテクニックでこの世を生きると言うのか！！」

「えっ……………」

父親の態度の急変を目の当たりにした俺は、ツインダガーを持ったままその場に固まっていた。期待する返事と違った事に対するのもあったけど、どうしてそんなに怒っているのかが俺には解らなかったんだ。俺の父親は傭兵であって、俺の目指すモノも父親と似た先にあるのに、どうし

て反対されているのかって。

「ちょっと貴方！」

「ビーストは元から体が丈夫、接近戦で戦うものだ。遠距離で援護をするだと、馬鹿を言うな！
！ テクニックなど、他人に任せればいい！！」

母親も口を挟むが空しく空を切り、父親は俺に向かって叫び続けた。父親が理想とする息子(おれ)の姿とは違う、常識はずれの理想を抱く息子(おれ)が、とても気に入らなかったんだなって、今では思うんだ。

俺もそんな夢を見なければ、そんな事をする奴は『変だ』って思ったと思うからさ。

「で、でも…………… 俺は！」

「『でも』じゃない！ ビーストの青年なら青年らしく、身体を鍛え、スキルを磨け！！ それが出来ないって言うんだったら……………」

ココから出て行け！！」

「！！」

完全に頭へ血が上った父親は、俺に向かってそう言い放った。夢を否定され、理想とする姿を父親に受け入れてもらえず、夢を抱く限り俺の居場所ではないと言い渡された事。幾多も重なる重度のショックが、当時の俺には処理出来なかったんだ。その場に固まった俺は目に涙を浮かべて、その場にしばらく立っていた。自然と流れそうになる涙は抱えた事のないくらいに大きくて、泣く事がほとんどなかった俺には訳が分からなかったんだ。

全部が全部、俺の言った事でなくなってしまった。それ以外は全て、解らないことだらけだったんだ。

だから、

「うっ…………… お、父さんの……………！ 馬鹿あ野郎おおおお！！！」

俺は整理出来ない感情をそのまま父親にぶつけ、叫ぶ事しか出来なかった。貰ったばかりの双小剣をその場に投げ捨てて、家を飛び出して行くしかなかったんだ。夢は否定され、居場所も失くして、理想とする姿が受け入れてもらえない自分なんだって。今まで考えた事もない事を父親に言われた事が、本当にショックだったんだ。

「ギラム！！ 待ちなさい、ギラム！！」

母親が慌てて飛び出した俺を止めようとしていたけど、その時の俺の耳には入らなくて、俺はただ我武者羅に夜の闇へと走って行った。何時までも零れてくる、涙を地面に流しながらな。

「貴方！！ あんな言い方は酷いじゃない！！ いくらなんでも、家から出すなんて！」

「アイツはもう家の子じゃない。忘れろ。」

「ッ！！！」

パシンッ

俺が飛び出した後の母親は、父親に対して手痛いビンタを放ったらしいんだ。父親らしからぬ穏便な返事でない、大人げないほどに騒いだ、自らも理想以外を認めない人間何だってことを教えるためにさ。俺の代わりに、夢を与えた張本人としてのケジメを付けたって、教えてくれた。

一方、家を飛び出した俺はというと。

「ううっ………… えぐっ…………」

いつもの遊び場である森林の木を背にして、ずっと涙を流していた。その場に辿り着く道中に、何度も足を取られて砂に倒れて、倒れての繰り返し。何回か道中で転んだのかさえ解らないくらいに、俺はただその場から逃げ出したかったんだ。

父親に、捨てられた現実を忘れたいがために…………な。

「……ギラム。」

そんな俺の元に声が来たのは、辿りついてどれくらいの時間が経った頃かは、解らない。ゆっくりと俺が顔を上げた先には、いつも優しくった母親が立っていたんだ。どうやってこの場が解ったのかその時は解らなかったけど、水滴と真新しい足跡でその場所を見つけられたって、後から教えてくれた。

「ゴメンなさい。私が貴方にあんな事をしたから、こんな事に…………」

「………… 母さんは、悪くないっ…………」

詫びを告げる母親に対して、いまだに涙を流す俺は慰めるように言った。いつも通りの口調で言ったつもりだったんだが、揺れる感情だけは押さえきれなくて、言葉が少し揺れていたんだ。

「俺が……父さんと正反対の事をするって、言ったのが悪いんだ………… ちゃんと考えを言えれば良かったんだが………… もう、何が何なのか……解んなくてさ………… 俺、逃げちまった。」母親はただただ俺の言う事を聞いてくれて、俺の言いたい事を掬い取ろうとしてくれてたんだ。初めに賛同してくれたからって訳でもなくて、ただ純粹に未来の目標が出来た子供(おれ)に対しての、その時唯一出来る事だったんだってさ。それだけ、俺が追いつめられていた姿を見ていたんだって、思うぜ。

たった一つの切欠で起きた悲劇であり、俺の行動次第ではその時に弁解が出来たかもしれない。でも俺はそれをする事をせず、ただその時の空間に居る事だけは出来なくて、俺の流し続ける涙を隠す夜の世界に逃げ出したかっただけ。逃げ出した俺には父親に対抗する自身もなくて、居場所もなくて、支えてくれる友達もいない。

……いや、居なかったんじゃないな。その時の俺には、母親以外に『信じられる相手』がいなか

ったんだ。

目標としていた父親に否定された事が、周りにも言える事なんじゃないかって。そう思う度に足が竦んで、前に進む勇気さえも失くしてしまうんだ。それこそが、俺が俺でなくなってしまった時なのかもしれない。

今の俺からしたら、想像できないことかもしれないけどさ。俺は元から優秀だったんじゃないかって、ただ望んだ夢を現実にしたかっただけなんだ。『ハンター』じゃなくて『フォース』になりたかったのも。それだけの理由だったんだ。

「ギラム、コレを貴方に託すわ。」

そんな俺が泣き止んだのを見て、母親は持っていた一本の短杖を差し出した。俺の事を手当てしてくれた際に使っていた物を、母親はわざわざ探して持ってきてくれたんだ。

「……コレ、母さんの大切な……」

「コメツタラック。貴方にあげるわ。」

俺の言った事を押し切って、母親は俺の手に短杖を握らせた。小さかった当時の俺でもしっかりと持てた短杖は少し重くて、とても励みになる品だった。

「テクニックは法撃武器が無いと使えないわ。コレを修行の糧として、頑張りなさい。」

真剣な眼差しで、母親は俺に言ってくれた。絶望に堕ちて行きそうな感覚さえあった俺に、その時の母親の言葉はとても嬉しかった。何もかも捨ててしまいそうなその時の感覚が、たった一言だけであり些細な笑顔だったかもしれないけどさ。

今の俺には、十分すぎる自身を与えてくれたんだ。

「……でも、俺はまだテクニックを……何も知らない。」

「大丈夫よ。廃材でもいいから、スキルディスクを探しなさい。それさえあれば、貴方はテクニックを仕える。安心して。」

「うん……俺、頑張るから。」

「偉いわ。ギラム。」

母親はそう言うと、俺を強く抱きしめてくれた。その感覚がもう二度と味わえないような気がして、忘れないくらいに俺は母親の背中に手を伸ばして、暖かさを知った。こんな風に優しくしてくれる人が、夢を語った跡でも居てくれる。そう信じられるようにな。

「必ず、帰ってきて。」

「うん、約束する。母さん。」

当時は最後だと思った挨拶を、俺は母親と交わして別れた。家には戻らない事を覚悟していたし、母親もその事を受け入れてくれた……のかは解らないけどさ。一緒に居て俺に指導するよりは、きっと自身が持てる選択をさせてくれたんじゃないかな。

おかげで、一人で十分にやり遂げられるくらいの自身は持てただけけどさ。やっぱり少しだけ、寂しかったかな。

一人なら、何も出来なかったかもしれないくらいにさ。

[.....]

でも俺は、その時からずっと一人じゃなかったんだ。母親と別れた時も、その前からずっと。俺のそばには、アイツが居てくれたんだ。

あの頃から現れた時

「……へえー そんな事があったのか……」

思い出話のように話す主人の昔話に対し、フィルスターは呟く様に言葉を漏らした。彼はリトルウィングに入社した頃のギラムと毎日過ごしてきたが、今まで昔話や過去に触れる話をあまり耳にした事は無い。

以前手当のためにと運び入れた『ナヴァル』以外は、その繋がりとなる話も聞いていない。ゆえに、とても新鮮な話に聞こえたのだろう。感想がとても簡素ではあるが、これ以上はない返事であった。

「主も、大変な生活をしてたんだ……」

同様にリニログーンも感想を述べ、手にしていたマグカップに入った珈琲を口にした。フィルスターよりも遅くその場にやって来たリニログーンも、主人の過去に触れる事は今までなかった。ナヴァルの件も今知ったに等しいため、どちらかと言うと彼の方が新鮮味が多いかもしれない。

とはいえ、原生生物との関わりあいと言う点では、中々想像が着かないのか少しだけ首を傾げていた。

「まあな。別に話すような事でも無かったんだが、フィルにはあのナヴァルの事もあったからな。話しておきたかったんだ。」

相棒達の感想を聞きつつギラムはそう言うと、何時しか手元に持っていた短杖を彼等に見せた。彼が持っていた短杖は、先ほどの彼の話に出てきた『コメツタラック』であり、今もなお愛用している彼の武器の1つだ。杖の先端にある部位からは黄色く眩いフォトン光を放っており、武器自体は雷属性である事を示していた。

「……って事は、その杖は主の母親の武器だったんだな。」

「ああ。威力はすでに最終強化を終えてるから、同レベルの杖の中で比べれば強力な分類に入る。おまけとして、自己回復能力を高めているように設計したんだ。」

「今じゃ模造品はあまり流通して無いし、持ってる人も少ないですからね。特に主のように、若い傭兵は。」

「そうだな。」

持ち出された武器を目にした2体は主人の近くへと移動し、互いに短杖へと軽く触れた。彼等もまた携帯している武器の中に短杖は入っているものの、今彼が持っている『模造品』とは違った正規の武器だ。一時期流行り種として流通していたが、今ではそれも薄く優秀な企業が開発した武器を、彼等には支給されているのだった。

「それで、その後の主はどうなったんだ？」

再び定位置へと戻ったフィルスターはマグカップを手にし、続きを催促する様に口火を切った。同様に隣に居たりニログーンも首を縦に振っており、こちらもまた話が気になる様子だ。

「それからは一人での生活だな。持っていたのはこの短杖だけだからロクに戦う事も出来なかったし、生活ももちろん辛かった。」

「だよなー」

それとなく過去を思い出しながらギラムは言うと、フィルスターは予想していた様子で相槌を打った。誰もが聞いても同様の検討が付くほどに、当時の彼はまだ幼く戦う術など持ち合わせていないと言っても間違いではない。

例え傭兵の父親そっくりの腕前を持っていたとしても、それは双小剣の話であり短杖では発揮されにくい長所だ。おまけに家を飛び出したとなると、基本的に野宿でありお金も一切持っていない状態。大人であっても、半ば挫けそうになる状態を少年時代のギラムは送ったのだ。

しかし、

「でも、意外な奴からの協力が偶にあったな。」

「え？」

話の不穏な空気が漂い出したその時、不意にギラムは一同を驚かせる発言をした。突然の発言にフィルスター達は耳を疑いつつも、その真相を聞こうと少し体制が前のめりになった。

「主、それは誰だ？」

「あのナヴァルだ。」

「「マジ!？」」

リニログーンからの問いかけに対し、ギラムは少し嬉しそうに答えを告げた。それを聞いた二体は驚き、さらに前へと身体が移動しながら声を揃えて叫んだ。軽く馬鹿正直な反応を見た事に対してなのかは解らないが、二体の様子を見たギラムは少し苦笑した。

「慌て過ぎだって。……どうもあのナヴァルは、あの時のやり取りを耳にしていたらしくな。ちよくちよく俺の前に出ては、捨てられたスキルディスクの一部と思われる物を持ってきてたんだ。」

「捨てられた？」

「使い物にならないスキルディスクは、砂漠地帯だからなのか良く落ちてたんだ。ソレを収集しては、俺の所に持ってきていた。もちろん壊れかけてる物が多くて、使う事は出来なかったけどな。」

「そうだったのか……」

苦笑しながらもギラムは話を続け、再び昔話が始まるように言葉が続けるのだった。

家を飛び出し母親と交わした約束のため、俺は一生懸命に砂漠地帯を歩き回り、廃材として捨てられているであろう『スキルディスク』を探していた。ほぼ一日中宛てもなく彷徨うに等しい搜索で、外で遊ぶことの多い俺でも、さすがに疲れてぐっすり寝込む日もあったくらいでさ。それくらいになるほど、まったくもって成果を上げる事が出来ずにいたんだ。

おまけにモトゥブの気候は良いとも言えなくて、砂漠地帯特有の砂嵐には特に手を焼かされたな。そういう日は一日歩く事も出来なくて、なおの事落ち着かない日もあった。そんなある日の事だ。

「スー……」

俺のお気に入りの場所である森での、ある朝の事だ。毎日一生懸命に砂漠地帯を歩き回ってスキルディスクを探していた俺は、その日は少し遅い起床となる予定だった。目覚まし時計はもちろん無いし、今みたいに端末を常に持つてゐる事も無かったから、完全に身体が目覚めない限り起きる事はしなかった。ゆえに、完全に爆睡してたとも言えるんだけどな。

カサッ……

「……うん？」

そんな日の俺は、寝床近くで起こった物音で目を覚ました。最近作ったハンモックで寝ていた俺は眼を覚まして、眠気眼を擦りながら音のした方角を見た。そこには木陰に生える茂みから顔を出した、小さい生物の姿があったんだ。

〔シャーッ〕

顔を出したのは小型の現生生物『ナヴァル』で、俺はそいつに見覚えがあった。それは家を飛び出す当日、昼間に罾から助けたあのナヴァルだったんだ。俺が起きたのを見ると、奴は茂みから身体も出して俺の事を見上げていた。

「あれ…… この前の。」

俺に用がある様子を見せるナヴァルを見た俺は、身体を起こし背を伸ばすと、木を伝って地面へと降りた。着ていた衣服の後ろからは母親から貰った短杖が顔を出していたけど、奴は特に警戒することなく静かに俺の元に寄ってきたんだ。軽く身構えそうになる俺だったけど、ゆっくり膝を曲げて視線を降ろして、相手の出方を見た。

「どうしたんだ？」

〔……〕

そんな俺の心中をよそに、ナヴァルは俺の近くで足を止めて顔を上げた。その行動の意味が解らず俺はしばらく見ていると、奴は軽く顎を上下に揺らして口を視る様俺に促してきたんだ。行動を目にした俺は首を動かして口を覗き込むように見ると、中に機械片らしいチップを咥えている事が解った。

「何だろう、コレ……」

俺が啜っていた物を見つつ呟くと、ナヴァルは数歩後ろへ下がって、銜えていたデータチップを地面の上に置いた。データチップには何か文字が書かれていたが、軽く唾液が付着していてすぐには読めなかった。けど、その行動だけで解った事もあったんだ。

「……くれるのか？」

〔シャーッ〕

啜っていた物を俺に渡そうとしてくれて、奴はその場に赴いてくれた事。俺がそれを悟った事を見ると、奴は軽く返事をして振り返り、そのまま駆け足で去って行ったんだ

「あっ……」

そんなナヴァルを見た俺は慌てて追いかけてみようとしたんだが、ナヴァルは俺の声を聞いても足を止める事は無くて、これ以上何かをするつもりは無いような気がしてな。だからってわけじゃないけれど、俺はその場に立ち尽くして見送った後、置き土産として残したデータチップの唾液を拭いしつつそれを貰う事にしたんだ。

「……………」

再び一人になった俺は、ナヴァルが置いていったデータチップを調べる事からスタートした。唾液による破損以前の破損はあったが、幸いにも文字はしっかりと読める状態にはなっていて、奴は真新しい物を持ってきてくれた様な気がしたんだ。

軽く手元がベタベタになりつつも、俺は読める文字を口にして読み上げた。

「……………フォトン・アーツ…… ……もしかしてコレが、母さんの言ってたスキルディ
スク……………」

そこに書かれていたのは『フォトンアーツ』の文字で、中身が何かは解らなかったが、俺が砂漠内で求めていた物の一つである事は解った。散々探しても見つからなかった物をアイツは何処から持ってきたのかは解らなかったが、それでも必ずこの砂漠地帯に存在する事だけは確証付いて、それだけでも俺は嬉しかった。嬉しさのあまり、俺は寝床近くに落ち葉と枝を使って、今でもよく使う『倉庫』の様な場所を作っちゃってさ。

これからは見つけたデータを、ココに置いて置こうって決めたんだ。

「でも、コレどうやって使うんだ……？ 壊れてるみたいだし……………」

とはいえ、まだフォトンアーツを習得するまでには俺は至っていない。飛び出した際の必要物資がある事が解っただけであって、まだまだ解決されていない問題が山積みだった。だけど、その日の行動は何処となく活気にあふれている様な気にも慣れたんだ。

『あのナヴァルが持って来たって事は、この砂漠の何処かにあるのか。』

ナヴァルが破片を持ってきてくれただけだったんだけど、その日は朝食となる木の実を齧らずに外へと出て行く始末でな。ちょっとした兆しだけで、俺は外へと飛び出すほどの子供だったんだって、今では思うんだ。

それからというもの、あのナヴァルは俺が丁度起きる頃を見計らってなのか、森に良く姿を現して、啞えていたスキルディスクを地面に置いて、去っていく事が多くなったんだ。最初は定期的とは言えない疎らな頻度だったんだが、徐々に頻度が増えて一日一回姿を見せてくれるようになった。その度に俺はナヴァルの置いて行ったスキルディスクをチェックして、今まで貰ったスキルディスクを確認して、どうやって起動させるのかを研究するようになった。

破損状況を見比べて、違う部分が起動装置なのかを調べて、文字配列の違いを探して、仕えるかどうかを試してみる。中々当たりを引き当てる事は出来なかったんだが、俺はその都度ディスクを大切に保管して、次に備えられるように毎日を過ごしたんだ。

あのナヴァルに、毎回感謝をしつつな。

そんな毎日が過ぎて、大体二ヶ月くらいが立った頃だったかな。

「で、出来た！！」

その日にナヴァルが持って来たスキルディスクの起動に成功した俺は、誰も居ない森で歓声を上げていた。スキルディスクに内蔵されていたテクニックは『フォイエ』という、火球弾を放つ炎属性の物だった。

「よし。後はこの杖で使うだけ……………あ。」

だが俺は喜びつつ杖を手にした時、気にする事さえしなかった新たな問題が生じたんだ。必要となるフォトン形状の姿が理解できても、その前提を俺はまだ理解出来ていなかった。

「……習得したフォトンアーツって、どうやって使うんだ……………？」

武器にフォトンアーツをリンクする方法が、まだその時の俺には解らなかったんだ。

〔……………〕

そんな俺の様子を木陰から伺っていたナヴァルは、ため息をつく様に呆れていたんだとさ。影ながらの助力がようやく実ったのに対し、再び壁にぶつかる俺が想定内では無かったんだって、呆れながら言ってたっけな。

「でも、コレも俺の力で頑張らないとな。誰の力も、頼る事が出来ねえんだし……」

ナヴァルのため息をよそに、俺は独り言を呟きながら短杖との睨めっこを開始した。

それから数時間が経過して、丁度日が傾いて空の色が橙に染まった頃だ。

「や、やった……！！ リンク出来た！！」

再び人気の薄い森から、俺の歓声が沸きあがった。周辺に人が居れば何事かと思うほどに、大声で叫んでいた記憶も無くはないくらいに、な。

短杖との睨めっこの末、俺はようやくフォイエのフォトンアーツの装備に成功した。その後何回

か短杖を振り周囲のフォトン元素を変換する練習すると、短杖から炎の魔法が出せる様になったんだ。まだまだ小さい炎だったけど、それでも嬉しさは大きすぎるくらいの成果で、俺も内心飛びあがりそうになるくらい嬉しかったんだ。

〔シャーッ〕

そんな俺の様子を見てか、あのナヴァルが再び森に姿を現してくれた。何時から木陰に身を蟄めていたのかさえ解らないくらいに、ナヴァルは俺の様子を見て首を傾げていたな。

「あ、あの時の。ようやく俺にも、テクニックが使えるようになったんだ！ 見て、くれな
いか？」

なにより上達を見せたくて仕方なかった俺は、アイツの返事を待たずに短杖を振って、小さめだが炎の魔法を出せる姿を披露した。俺が何度も見せるテクニックを見ても、ナヴァルは鳴かずにただそこにいて、俺が飽きるまでずっと見ていてくれたんだ。

「コレも全て、君のおかげだ……！ ありがとう！！」

複数回発動して気が済んだ俺は、感激のあまり大人しくしていたナヴァルを抱きしめちゃったんだ。持っていた杖も地面に軽く頬る形で捨てちゃっていたくらいに、俺は無我夢中だったんだなって思うぜ。

〔！！ キシャーッ！！〕

「ああ、悪い悪い。」

とはいえナヴァルからしたら予想外の行動だったからか、先ほどまでの穏やかさの無い鳴き声を上げた。軽く奥の牙を見せるくらい怒った声を聞いた俺は、慌ててナヴァルを離して相手の様子を見た。奴は距離を開けつつ威嚇していて、牙をむき出しにして今にも襲ってきそうなくらいに殺気立っていたんだ。

でも俺は侘びよりも嬉しさが強かったからか、あんまり発言に気持ちが入っていなかった様にも思えるくらい、簡素な侘びだったのかもしれないな。

「ゴメンな、つい嬉しくって……俺だけの力じゃ、何も出来なかったからさ。」

〔……〕

ナヴァルの怒る様子を見た俺は少し顔色を暗くしつつ、再度ナヴァルに詫びを述べた。脱力感以前に夢のために行動した結果、自力で全てを乗り越える事が出来ず、ナヴァルの助力があったからこそ今に至る事ができた。おまけに感情的になって相手を怒らせてしまうくらい、軽率な行動をしたと俺は深く心を痛めたんだ。

そんな時だ。

スッ

「……？」

数歩間合いを開けていたナヴァルが歩き出て、静かに俺のそばに寄ってきたんだ。あぐらをかき様に座っていた俺の足を踏み越えて、身体に顔を擦りつけて優しく鳴いてくれた。

〔シャーッ……〕

「…………… ありがとう……さん。」

ナヴァルが何を言ったかは解らなかったが、俺は嬉し涙を流しそうになりながら、優しくナヴァルの頭を撫でた。すると今度はナヴァルも否定しなくて、俺のそばを離れようとはしなくなったんだ。

次に迎えし俺の時

ナヴァルが俺と接触する日が次第に増えだしたあの日から、アイツは俺との生活を送る様になった。俺の前から姿を消していた時期は無くなって、寝泊りしていたハンモックの上で寝る、俺の上で寝るようになっていた。寝床まで運んだ俺の経緯が始まりだったが、その後じゃそれが『日常』となるくらい、俺達は一緒に暮らしていたんだ。

寝る時はもちろんだが、その頃は同じ場所で食事もするようになっていた。森林内にある小さな泉での水浴びもそうだったし、俺もその頃の生活が好きだった。家族と離れる事を選んだ俺が、また新しい家族の様な友人と出会えた事。その事へ対する喜びもそうだが、何より一緒に居られる事の心強さが一番強かったんだ。俺達と違って会話は出来ないが、ナヴァルは俺の考えを認めてくれていた理解者の一人。だからこそ、一緒に居て本当に楽しかったんだ。

そんな友との生活は、ただ単に寝床に限った話じゃあないんだぜ。

俺の夢である『テクニックを使えるビースト』の目標は、覚えた時からも続いていた。単に覚えた事と使いこなせる事は別の話で、俺は毎日の様に練習したんだ。短杖を振る際の基本動作もそうだし、フォトンとの感度を高めるために自然と神経を外へ向けられる様な練習もした。気功に近い訓練だったんだが、やっぱりそう簡単に行かないのもまた現実でな。ニューマン以前にヒューマンに劣るほど、ビーストはテクニックとは縁が無い。父親が激怒した理由って言うのは、多分こういう苦勞を武術よりも強いられて事だったのかもな。今なら、少しだけ父親が反対した理由は解るぜ。

でも、それでも俺は止めようとしなかった。

幸いナヴァルが俺の相手をしてくれる事が多くて、時折仲間を引き連れて俺のために練習会を開いてくれたりもした。まあ、実際には俺にどうこう言う事は出来ないから、単に俺がそう言う風に認識していたって言うのが正しいな。目標を見定めて、その場所に的確に超常現象を起こす。もしくはその場所に確実に命中するほどの正確性を要求されて、これには中々骨が折れたな。全然、笑えるくらいに上手く行かねえんだからさ。これには何度か、ナヴァルからのタックルが飛んできた記憶もあるぜ。『下手過ぎる』って言いたかったのかもな、あれは。時折暴発して、ナヴァルの尻尾に引火したくらいだからな。それだけ、小さい頃は頑張ったんだ。

そんな修行を含めた毎日を送って、数年後の事だ。俺は当時十五歳になっていて、出会い当初の少年という頃から、それなりに逞しい青年になっていた。体格はビーストに相応しいほど筋肉質になってきたし、顔付きからして大人に近い状態へと変わっていたと思う。ナヴァルはというと、特に変わった変化は無いんだが、体格が少し大きくなっていた様にも感じたな。

そんなある日の事だ。

〔……シャーッ〕

俺は自分の近くで寝ていたナヴァルの声を耳にし、その日は目覚めた。身体が大きくなった事もある、アイツは最近俺の上では寝ず、下で寝るようになっていたんだ。ハンモックの位置もその頃から下に移動してて、普通に聞こえるくらいの距離にな。

「? どうしたんだ、ナヴァル。」

まだ完全には覚めない眼を擦りながら、俺は身体を起こしナヴァルの事を探した。すると奴はすでに元気いっぱい、尻尾を振り何処かへ行こうと目で言っていた気がした。それを見た俺は地面に足を付け背を伸ばし急いで顔を洗うと、ナヴァルに合図し何処かへ連れて行こうとする奴の後ろをついて行った。

朝食用の木の実を齧りながら、俺はナヴァルの後を追った。軽く追いつくかどうかのスピードで走ってくれるナヴァルに感謝をしながら、朝方の砂漠地帯を走り出す。その日も明方から少し熱を感じられるほどの気候で、昼間になったら焼ける様な日差しが照りつけるんだろうなって思えるような今日だった。

〔……〕

「ここは……」

ナヴァルに導かれ俺がやってきたのは、武器の廃棄処分を行う工場だった。当時は名の知れた三社以外にも多数の企業が行動していて、武器も研究を繰り返して強い物が幾つも造られていた。その分廃棄される武器も少なくなくて、こうやって集められて再利用、もしくは分解作業を行う所もあったんだ。

「ナヴァル。ココで何をやる気だ?」

〔……〕

そんな廃棄工場の近くへと連れてこられたものの、俺には何をしたらいいのか解らずナヴァルに問いかけた。すると奴は顔の向きを変え、何かを視る様に首を動かした。奴の目線の先に合ったモノ、それは処分される前の武器が入ったコンテナ。上からは目に見える程の大量の武器の一部が顔を出しており、モノによっては真新しい物も混ざっていた。

「処分工場の武器…… って事は、アレは時期に処分されるのか。」

〔シャーッ〕

俺が言った事に対してナヴァルは鳴き、その場で軽く飛び跳ねた。奴は俺と言葉を交わす事は出来ないが、俺が奴の思考に近い回答をすると身体で返事を返してくれていた。言語そのものを理解している……とは言い難いんだろうが、奴は俺の言葉をちゃんと聞いてくれている事だけは解ったんだ。

ゆえに、導かれたココで俺が出来る事がある、と言う事を奴は言いたかったのかもしれない。

「……なるほどな。俺もそろそろ働ける年になったから、ココで働けて事か。あの様子だと、あの武器は要らない廃棄物。貰っても支障は無さそうだな。それに、働けば金も入る……っ

てか？」

〔シャーッシャーッ！〕

半ば親父みたいな感覚でナヴァルは俺の面倒を見てくれていて、適齢の年頃？となった俺に働く様指摘したんだ。さすがにこの年じゃ助手に近い仕事しか貰えないだろうけど、工場だったら幼い相手でも雑用くらいはさせてくれる。ましてやそれに対する見返りと、俺が叶えたい夢に必要な『武器』も手には居るとしたら、渡りに船だ。

「ありがとさんナヴァル。さて、ココからは俺の腕次第だな。」

そうなると行動あるのみ、俺は早速工場で空いている仕事は無いかを確認めに向かって行った。住所そのものは前の物を使う事になるかもしれないが、多分そのあたりは母親が何とかしてくれるかもしれない。なんて、甘い期待もあったからな。俺は早速、面談をパスし書類もその後に作成して、仕事を貰えるようになったんだ。

それからはしばらくの間、休暇以外を仕事のために費やす事にしたんだ。

誘いにより進んだ時

工場内の面接をパスした俺は、給料の額はさておき工場内で働けるようになった。母親とは連絡を取る事は少しだけあったが、そんなに頻繁にはする事は無く、ちょっと親不孝者に近い青年時代を送っていた。まあ、家出をしてる時点で駄目なのかもしれないけどな。

仕事場で配属されたのは、運良くも廃棄武器の仕分け作業。自分で捨てられる予定の武器の仕分けもでき、まだ仕える武器は話をし貰って帰れるようにもなったくらいだ。こういう現場の人達は気の置けない人達が多かったが、何かと気さくに話しかけてくれて、俺も少し楽しく過ごせた。

でも、夢の話だけは一切しなかったんだ。

武器も目立って貰う事はあんまりしないで、法撃武器に関しては本当に人目に付かない時にしか貰わない。目立って貰ったのは双小剣ばかりで、その辺りはまだ父親を目標にしていた名残だったのかもな。つつい貰っていた。

給料と貰った武器の売買によって生活するだけの資金を得ると、俺とナヴァルは今よりも楽な生活が送れるようになったのは、言うまでもないな。今までの食事の種類とは格が違うほど豪華になって、今まで同様にスキルディスクの調達も行って、仕えると判断して残した武器のために使った。多少余ったお金で、今まで使ってボロボロになりかけていた服を目にして、服にもお金を回したくらいだ。一つの行動のおかげで、俺は今まで以上の成果と生活を手にする事が出来たんだ。

あのナヴァルはと言うと、自分の情報のおかげで豪華になった食事を眼にし、嬉しそうに食べていたな。主食となる肉も、豪快に食い散らかしてたくらいだ。

そんな毎日を送り、一年後のある日の夜だ。

「今日もお疲れさん、ナヴァル。」

森林の一角で焚き火をし、俺とナヴァルは夜の食事を取っていた。その日の食事は肉中心の豪華なフルコースで、もちろん野菜もバッチリなくらい豪勢な物。ナヴァルの分にも料理を取り分けた後、俺はアイツの前に差し出した。

「ナヴァルのおかげで、俺もココまでの生活が出来るようになった。本当にありがとな。」

〔シャーッ〕

俺からの感謝の言葉を耳にしながら、ナヴァルは食いついた大きな肉を口にしつつ鳴き声を上げた。骨が付いていようともついていなくとも美味しそうに食べるナヴァルの喰いっぷりには、俺も現生生物であるコイツの素性を思い出すくらいだ。

その気になれば俺も食べられちゃうのかもしれないが、今の俺も一筋縄じゃ餌にはならないくらい、実力はつけてきたつもりだ。まあ、そんな事は一切なかったんだけどな。

「今日もたくさん食べな。俺も食べて、体力を維持しねえと。」

ナヴァルの嬉しそうな姿を目にしつつ、俺も食事を取っていた。

「……本当。今まで俺だけの力じゃ、どうにもならなかつただろうな…… こんな生活、再び送れるようになるとは思っても見なかつたぜ。」

食事を進めつつ、俺はナヴァルに語りかける様に呟いた。ナヴァルは特に返事はせず俺の事を見ていて、しきりに口の中を動かしている所を見ると、喰いながら聞いているって所だろうな。

「お前がスキルディスクを見つけてくれて、共に修行の相手をしてくれて、工場の仕事を勧めてくれた。お前には、たくさんの借りが出来ちゃったな。」

ギラムはそう言いつつ、独り言に近い語りを軽く聞いていたナヴァルの頭を撫でた。

〔シャーッ〕

「でも、まだまだ俺は未熟だ。もっと修行をして、親父に認めてもらえるような立派な仕事をしないと。」

ナヴァルの頭を撫でつつ呟くと、俺は今まで確保してきた武器達を見た。寝床の近くに置かれている数個の武器は、全部で四つ。その内の三つは低レベルで初心者向けの武器として作られた『長杖(ロッド)、双小剣(ツインダガー)、片手剣(セイバー)』で、残りの一つは母親に貰ったあのコメツタラック。ほとんど対した戦力にはならない物とされているけれど、今の俺にとっては十分な戦力になるものだ。

一般的な傭兵達からしたら、それはもう笑われるだけの覚悟があるくらいの未熟な品と實力しか今の俺にはない。だがそれでも曲げたくない夢があって、それを応援してくれる友人が居てくれる。その期待には応えたくて、夢を叶えたくて、俺はその武器達を糧にして行動して行こうとしていた。

どんなものでも、輝くだけの光がある。

俺はその時からそう思う事が少なくなくて、多分それからも変わる事は無いんじゃないかって思えたくらいだ。ビーストがフォースをやったって、良いんじゃないかって言われたいがためにな

。「ご馳走様。じゃ、明日に備えて今日は寝るか。」

〔シャーッ〕

そんな他愛も無い独り言をしつつ食事を終えた俺は合掌し、ナヴァルは軽く鳴きながら俺の元へと移動してきた。こいつもそんな俺の事を微力ながら応援してくれて、これからもきっと応援してくれる。そう思う度に俺は嬉しくて、ナヴァルには何度も感謝をしたいって思ったんだ。ゆえにもし、夢が叶い認められる様になったら。ナヴァルには最初に報告をして、初めに喜びを分かち合いたいって願っていた。

それからしばらくして床に就いた俺は、再び新たな朝を迎えた。先日の残りご飯を朝食に、身支度を済ませ食事を取っていた時の事だ。

〔………… シャーツ〕

朝食途中の俺を見ながら、ナヴァルが唐突に鳴き声を上げた。食事の皿は綺麗に無くなっているが、どうやら飯の催促ではない様に思えた。

「？ どうしたナヴァル。」

俺は口にした食物を飲み込み質問すると、ナヴァルはその場で立ち上がり背を向けた。この場合のアイツは何処かへ行こうとする合図であり、どうやらその日は連れて行きたい場所があるようだった。

『前にもあったな、こういうのが……』

そんな奴の後姿を見た俺は短杖を持ち立ち上がると、走り出したナヴァルを見てその場を駆け出した。

その日は日が昇りかけた朝靄が浮かぶ砂漠地帯であり、少し涼しくも感じていた。歩きなれた砂漠をナヴァルと共に駆け、何処へ行くのだろうかと思いながら着いて行く。その時、俺はある事に気が付いた。

『……そういや最近、アイツがスピードを緩める事は無くなった様な…………』

それはアイツに付いて走る事はあったが、歩調を合わせる様に走る速度を変える事をしなくなった事だった。俺が気が付いた時にはもう、俺は初めに会ったころの俺ではなくなっていたんだ。

少年から青年になった今だからこそ、体力は上がり磨いた腕を発揮できるほどの実力をつけた。それはナヴァルと共に行動する時にも言えて、走る速度も持久力も上がっていたんだ。気が付いた時にはもう、俺は子供ではないんだって思えたくらいにな。

確実に、夢に近づいている様な感覚さえ覚える。

そんな俺がナヴァルに導かれ、とある場所へと向かって行った。

誰にも話したくない思い出の時

ナヴァルに導かれながら走りつづけ、多分1時間近く走ったかもしれない。その頃に俺は、視界が徐々に変わり岩肌の続く場所へとやってきた。砂漠地帯には時折こういう場所がある事は解ってたが、正直言ってここまで走ってくるのは初めてかもな。それくらい俺は走っていて、気が付いたらあの場所の入口に導かれたんだ。

アイツと俺だけが知っていた、あの場所に。

〔.....〕

「ナヴァル。ココに何があるんだ？」

岩肌の一角にぽっかり空いた洞窟の入り口を見て、俺はナヴァルに問いかけた。でも奴は珍しく返事をする事無く洞窟の中へと入って行ったから、仕方なく俺も後に続く事にしたんだ。今更巽にかけよう、何て思うはずもないって思ったからな。それだけ俺は、あのナヴァルに信頼を寄せていたのかもしれない。

.....まあ、普通に考えたらおかしい話なんだけどな。相手は原生生物で、俺達が討伐対象として見る事のある相手なんだからさ。

そんな妙な事を考えながら、俺は入口へ入り短杖から炎を出した。さすがに昼間でも洞窟の奥は視界が効かなくて、いかにも何か出そうな雰囲気だったからな。少なくとも視界だけは効かせようって思って、そうしたんだ。

すると徐々に辺りが明るくなって行って、先行していたナヴァルの姿を見つける事が出来た。軽く炎の光で目が光っていたが、多分アイツには視える暗さなんだろうなって、原生生物の強みを悟っていた。出なければ、アイツがあの洞窟を一人で無傷で走り続ける事なんて、出来ないだろうしな。

そんな事を考えながら進んで行くと、洞窟の先に一点の光を見つける事が出来たんだ。よく見ると、それは洞窟の出口だった。

「お、出口か。」

俺はようやく出口を見つけて軽く喜んだのも束の間、再びナヴァルが出口目掛けて走り出して行ったんだ。

慌てた俺は短杖をしまい走りだし、強い日の光が降り注ぐ出口の先へと飛び出した。そうしたらその先に広がってる光景が、一瞬で白から紅色に変化した。強い光で一瞬目が眩んだが、その中に別の色がある事だけは解った。

早々に俺は光に慣れようと右手で日陰を作って前を向くと、そこには砂漠地帯とは思えない景色。新緑の草原のなかに咲き乱れる、紅色の薔薇園だったんだ。

「凄い..... モトゥブの砂漠地帯に、こんな綺麗な場所があったなんて.....」

目の前に広がる花園を目にした俺は、驚きながらも思わず感想を言葉にしていた。薔薇自体が咲いている事にも驚いたが、その場所に咲く薔薇が不思議な色をしていた事も、驚いた理由の一

つだ。普通の薔薇よりも色味に透明感があって、その上光沢のある紅色だったんだ。今の職場についてから花屋は見かける事はあっても、あの綺麗な薔薇だけは見つける事が出来ないくらいに、俺は凄い物を見た。

あの場所の事だけは、今も知ってるのは俺とアイツと、フィル達を含む一部のメンツだけだ。

「もしかしてココは、ナヴァルの秘密の場所なのか…… なぁナヴァル。……ナヴァル？」
軽く辺りを見渡しながらか薔薇の美しさを堪能していると、俺は遅れて異変に気が付いた。さっきまで一緒だったナヴァルの姿を見失っていて、その上呼んでも返事が無い状態になっていたんだ。

「ナヴァル？ おいナヴァルー 何処だー」

少し様子がおかしい事に気が付いた俺は辺りを見渡しながらかナヴァルを呼び、周囲の状況を確認した。洞窟での道中は一緒に歩いていて、出口までは一緒だった事は確かに確認していた。という事は、絶対にこの場所へ出ていた、この周辺に居ると俺は確信していたんだ。

だからこそ見つけられない事に不安を感じながら、俺は隠れ場所の無い花園を探し回った。すると、

〔シャーッ！！ シャーッ！！〕

花園の崖際付近から、いつもとは違う荒れた鳴き声が聞こえてきた。

「！！ ナヴァル！！」

声を耳にした俺はすぐさま崖際へと向かい、崖下を覗き込んだ。そこにあっただのは一台の赤いカーゴで、そのそばには数人の人が立って、近くある檻を囲んでいた。遠くから見る限りどんな奴だったかは解らなかったが、その檻の中に居る相手だけは認識出来た。

ナヴァルが、掴まっていると。

「ったく。車からだと上げれねえからって上に上がったら、こんな珍しい原生生物を見つけれらるなんてなぁ。」

〔シャーッシャーッ！！〕

どうやらナヴァルはあの時、俺が薔薇と日光で眼をやられていた時。奴等が崖を昇って薔薇を見つめようとする前に、身体を張って奴等を崖下まで突き飛ばしたらしいんだ。でも高さがあった分ダメージも負って、隙ができて捕まったんだって、後から聞いたんだ。

「ナヴァル！！」

俺は即座に来た道を引き返し、ナヴァルを助けるために全力で走りだした。洞窟の入り口まで戻った後岩肌に祖って歩き、道が続いていそうな場所を見つけたと同時に、俺は手元に長杖を召喚した。短杖よりも威力が出るし、両手武器ならある程度の攻撃も防げるだろうって確信もあったからな。

その時の武器は、それを選んだんだ。だが、

ブロロロ.....

『マズイツ.....！！』

崖下へ通ずるであろう道を走っている最中、カーゴのエンジン音と思われる音が聞こえだしたんだ。まだ曲がり道にすら到達していない状態でのエンジン音はヤバい状態だとしか思えなくて、俺は力を振り絞って精一杯両手足を動かした。でも、あと一步の所で聞こえてきた声はこれだった。

「さあ、増殖される前に撤退するぜ！」

「了解だぜ兄貴い！」

カーゴに積まれたナヴァルが檻に体当たりをする音も虚しく、奴の影が小さくなる光景を俺は見失ってしまった。走り出したと同時に舞い上がった砂埃で完全に視界は封じられていたし、全力疾走した分の体力の消耗もあったから、それ以上追いかける事も出来なかった。

「.....ッ！！ ナヴァアルウウー——！！」

俺はなす術もなくナヴァルの消え去る姿を視ながら、俺はその場で叫ぶ事しか出来なかった。

別れと誓いの時

目の前で支えてくれていた友人を奪われたその日、俺の脚はとても重たく感じた。すぐさまアイツを見つけられなかった事もだが、何よりも助けられなかった事が本当にショックだったんだ。何のために家を飛び出してまで叶えようとした事を、近くに居てくれた相手にすら叶えられなかった現状。

それが一番、辛かったんだ。

「すまないナヴァル……俺がすぐさまお前の居場所が解らなかったばかりに……！
クソッ！！」

バンッ！

悲しみに対する怒りを抑えきれなくて、俺は握った拳を近くの岩に向かって苛立ちをぶつけた。無論殴った後は手に痛みが残るけれど、それでも俺は殴りたかったんだ。不甲斐ない俺の力だけじゃ、守りきれなかった。鍛錬も働いてからは比較的頻度が落ちていた事も、理由の一つなんじゃないか。何よりもテクニックそのものの力が強ければ、崖上からでも放てたんじゃないか。

。いろいろな仮説が思い浮かぶくらいに、後悔が多すぎたんだろうな。俺の苛立ちをぶつけた岩は、殴られた箇所を砕く様にヒビが入ってたくらい、力強く殴ったんだと思う。

「俺はもう、何も出来ないのか…… アイツが居なければ、こんな事をして意味が無いじゃないか……」

そのまま岩にもたれる様に背を預けながら、俺は流れ落ちそうになる涙を堪えてた。こんな所で泣くなんてありえないって思ったのもあるが、何より泣いてばかりいる場合じゃないって言うのが強かったからな。

俺は家を飛び出した後にも泣いていたし、あの時に一生分に近い涙を流したつもりだ。泣いてばかりいる奴が、種族に見合わない夢を叶えるなんて、出来るはずないって。ある意味、小さいプライドを持ってたんだろうな。だからこそ、アイツの為にも泣かない様にしてたんだ。

それからしばらく空を見上げ涙を堪えた後、俺は住处にしていた森に戻って来た。フラフラとした足取りで戻った俺は崩れる勢いで定位置に座り、溜息をついた。それからゆっくりと前を向いてみると、そこにはナヴァルが今朝まで居た痕跡と思われる砂の跡が残っていたんだ。

焚火のそばに座っていたアイツは、何時も食事の時に尻尾を振っていて、その動きで出来た砂の後が定位置で食べていた事を示していた。アイツはいつもそこに居て、家から飛び出した後は俺の家族みたいな感覚さえ覚えるくらい、奴はずっとそばに居てくれた。修行の時も居て、食事の時も居て、水浴びをする時も居て、寝る時もずっと一緒だった。

だが今はそこには居なくて、食事のときに使用していた皿と砂の後しか、ナヴァルを思わせる物が無かったんだ。でも、それがスイッチになっちゃったんだろうな。

「………… ナヴァル……」

俺がアイツの事を呟くと同時に、引いたはずの涙の波が突然やってきて、気付く間もなく流れ出したんだ。慌てた俺は涙を拭おうと腕で拭いたんだが、それでも意志に反して涙は流れて、頬を伝い地面に落ちた。

「ッ…… 何で泣いてんだ、俺………… あの時からもう、涙は流さないって決めたじゃねえか…………」

自分に言い聞かせるように俺は言うけれど、それでも駄目だったんだ。アイツとの別れが残酷過ぎて、それを思い出すたびに後悔がやってきて。自分の力の無さを責め続けて、自分の価値が小さ過ぎて、もう駄目だったんだ。

「………… うっ……うわあああああ——…………！！！」

そして俺は抑えられなくなった感情に身を任せて、とうとう大声で泣き叫んだ。これ以上無いくらいに大きく叫んで、たくさん泣いたな。誰も居ない筈の森の中に轟く泣き声は、多分誰も聞いていなかっただろうしさ。それよりももう、抑える事を止めたくなかったんだ。

ナヴァルを助けられなかった、ただそれだけに対して泣きたかったんだ。自分が小さい事を見つめなおす、良い切欠だったのかもしれないしな。

もう俺は、自分に偽る事を止めたんだ…………

「…………クソッ…… 結局泣くだけ泣いちまった…………」

泣き出してからどれくらい経った頃か、正気に戻った俺はイラつきながらも涙を拭い、その場を立ち上がった。向かった先は奥にある泉で、その後全力で顔を洗いまくって、泣いていた事さえも忘れさせるくらいスッキリしてやろうってやけになってた。

泣いたおかげもあってか気持ちの整理も出来て、顔を洗ったせいかより気持ちも落ち着けてたな。

『……でも、これからどうするかな。今の仕事を続けていても、絶対にアイツの事を探し出せねえもんな…………』

その後近くに干してあったタオルを手にし、顔を洗いながら今後どうするかを考え出した。確かに今の暮らしを続けていけば、生活にもお金にもそこまで困らない生活が送れる。だがそれは十分とはいえる額でも無い上に、連れ去られたナヴァルの手がかりを掴むなんて、難しいにもほどがあった。

収益も含め、どうにかしてナヴァルを助けられる方法は無いか。それが一番、重要視する項目だったな。

『アイツに対する恩は、まだ返していない。もっと……効率良く、アイツを探す手がかりを掴める方法を探さねえと。』

顔を拭き終えタオルを手にしたまま、俺はその場に座り込みどうするか考え出した。幸いにも職歴と呼べる物はナヴァルのおかげで手に入れられたし、住処そのものは実家の住所を利用すれば何とかなる事も解ってた。でも何時までもそうするわけにもいかなかったからこそ、自分で生活できる居住空間と仕事を手に入れたかった。

住む場所も生活するための資金も集められて、なおかつナヴァルを探せそうな仕事。そんな雲をつかむ様な仕事なんて、俺には考え付かなかったな。……そう、その時までは。

「……………ん？」

如何せん世間の目線が無かった俺が頭を捻っていると、不意に俺の眼にあるモノが飛び込んできた。それは泉の近くにある木の根元付近であり、そこには削ったに近い書き方をした文字の様な物があつたんだ。

「傷……でも、違うな。……あれ、待てよ？」

文字を見ていた俺は何だろうと近くに向かうと、文字を指でなぞり自然に出来たモノではない事を理解した。それと同時に脳裏を過ぎる仮説が浮かび、記憶の中に眠っていたある光景がよみがえつたんだ。

それはある日の昼下がりの午後、俺が仕事を終えた後の日の事。食事後の休憩時に目にしていた雑誌を視る、ナヴァルの姿だった。

「そういえばアイツ、良く砂地にこんな文字っぽいのを書いてたな…………… 確かそれは……いつも……俺が文字入りの雑誌を、視ていた時！！」

不意に目の前に映った記憶を目にした俺は、文字を書いた相手が誰なのか理解した。同時に俺はその場を駆け出していて、寝床近くに管理していた雑誌を引っ張り出し、再び文字の掛かれた木の根元へと座り込んだ。そして、お得意の長時間睨めっこの解読タイムが始まったんだ。

昔から得意としていた、地味な理解力がこんな所で役に立つなんて、今まで思っても視なかったけどな。でもそれのおかげで、当時のアイツからの最後の言付を理解できたんだ。

それから時間が過ぎる事、数十分……………

「……解けた！！」

俺は解読し終わると同時に雑誌を放り投げ、手元に残ったメモを見た。そこには、削られて出来た文字を解読し、乱雑に書かれた俺の文字が残っていたんだ。書かれていたのは、四つの文字だった。

「ヨ・ウ・ヘ・イ…………… 傭兵……？」

解読し終え口にしてみると、俺はそれがあつた仕事を表しているんじゃないかと推測した。元よりその仕事には覚えがあつたっていうか、父親の仕事とまったく同じだったから、意識しないで忘れていたに等しい物だったからさ。

口にするまで、本当に忘れてた仕事だったんだ。

「まさかアイツ…… あの後に何か俺に言うつもりで…… しかもココに書いたって事は、あの後何があっても良いように……って事なのか……？」

その後何故か単語と同時にナヴァルの映る景色が次々と広がって、あるシナリオが俺の中で浮かび上がった。何で俺の中でそんな空想が出来る程の力があつたのかは良く分からないが、なんとなくナヴァルのしたい事は過ごして大体は把握できていたからな。多分それが、そこまでの理解に繋がったのかもしれない。

まあ普通に考えて、原生生物を理解するなんてしないだろうけどな。ましてやナヴァルだ。多分というか、まずないだろ。

グシャッ

「……なるほど。アイツ、最終的に俺がコレを出来るように、廃工場に仕事をするように勧めたのか…… ハッ、手の込んだ事しやがって。」

その後無駄な空想から戻って来た俺はメモを握り締め、その場に居ないナヴァルに対して言葉を告げた。アイツが最終的に何をさせたかったのかはその時解らなかったが、あの後会ってからそれが正しかった事を知る事も出来た。

だからってわけじゃないけれど、ナヴァルの気持ちは本当に嬉しかったんだ。

「ありがとうナヴァル。コレなら、時間はかかるがそう遠くは無い。お前も助けられるし、親父を見返すことも出来る最高な手段だな。」

木に彫られた文字を軽く撫でながら、俺はそう呟きその場に立ち上がった。もうナヴァルに会う事は出来ないけれど、俺の道標をしてくれた事は確かだったからさ。

止まってなんかいられないって、その時決心したんだ。

「絶対に助けるからな。 待っててくれ、ナヴァル。」

もう一度傷跡を視ながら、俺はその場の景色を忘れない様目に焼き付けそう呟いた。その後俺はその場を離れ寝床へと向かい、その日まで集めた武器達を装備し、森林を後にした。

悲劇と決意の時

ナヴァルから託された『書置き』に等しい道標を頼りに、俺は砂漠を抜け、惑星モトゥブ内にある街へとやってきた。田舎暮らしに等しかった俺がこの場所へやって来たのは、母親と共に買い出しに出かけたあの日以来だろう。

……いや、正確に言えばその後も少しだけ足を運んでただけどな。身形を整えるためでもあるし、食事の件もそうだ。

そんな俺が街へと赴いた理由、それはただ一つ。

『傭兵になる』

それだけだ。

奪われた最愛の友を見つけるため、そして夢を拒んだ父に対する功績を認めさせるため。俺は街の一角に存在する局へと向かい、傭兵になるための手続きをする。戦闘タイプはもちろん、迷うことなく『フォース』で登録をしてもらった。

それからの毎日は街構内にある借家へと入居し、所属する軍事会社や組織が無い状態として、フリーの傭兵としての時を過ごした。以前までの工場内での働いていた暮らしよりも大変な毎日を強いられて、まるで家を飛び出したあの時同様に辛い毎日を送る。今回は支えとなる友が居なかった事もあったから、挫けそうになる事が多々あって、悔し涙を浮かべる事もあったんだ。

でも、諦めるわけには行かない。

ただその一心で俺は仕事先を訪れ、仕事をこなし報酬を貰って、毎日を過ごしていた。無論依頼でパーティを組む事になった他の傭兵達からの白い眼もあったけれど、もう俺は自分の生き方に恥を覚えていない。実力はニューマンに比べれば平然と劣る部分もあるけれど、彼等よりも打たれ強いと言う利点もある。

ましてや接近をこなす事も出来るからこそ、俺は両立できる自分を目指そうって、その時から適度に意識してたんだ。でも、戦闘タイプだけは変えなかった。何が何でも変えたくなくて、自分を貫きたかった。

そして、惑星パルムにでのレリクスに赴き、依頼に参加した時。世界を巻き込んだ少女との事件に、俺は出会ったんだ……

「凄い……」

語られる事の無かった主人の昔話を聞き終え、感想を即座に漏らしたのはフィルスターだった。彼は主人が本来希望していた戦闘職業を知る数少ない理解者であり、ギラムの補佐を生業とし、家族の次に長い時間を接してきた。

しかし彼の過去に関する情報は提示された物以外は知る事を禁じられており、本人の口から話された事が驚きの連続だったのだろう。啞然とする以前に、それ以外の感想が言えない様だった。

「主。まさか俺と似たような苦難の日々を過ごしてたなんて……」

「信じられない……」

同様に啞然としてしまい物も言えない状態となっていたのは、フィルスターの隣に座るリニログリーンもだ。彼はフィルスターの次に主人の事を理解していると思い込んでいたが、昔話に登場した『ナヴァル』が自分よりも主人を理解していた事。ましてやそんな大事件が、自分の知らない所で起きていたとは考えもせず、今の今まで一緒に居る事が楽しいと想っていた。

だが実際には自分と同等、もしくはそれ以上の苦難の日々を過ごしていた。訳有に等しい二体ですら、このような状況にさせてしまうほどのギラムの昔とは。一体どういう者になるのか、とても想像が着かないと言えよう。

「何アホ面してんだ、お前ら。」

しかしそんな2体の相棒の反応を目にした主人は、苦笑しながら昔を感じさせない笑顔を見せていた。今の彼の戦闘タイプは『フォース』ではなく『ブレイバー』として過ごしているが、これは本人が望んで申請した結果に過ぎない。叶えたいがゆえに捨ててきた過去が存在していたとしても、彼は今の生活を楽しく過ごしており、昔話を真面目に聞いてくれる相棒達が居る。少々お節介焼きで口五月蠅いパートナーと言える存在達に出会うも、そんな毎日ですら彼は嬉しいのだ。

友人からの意志を聞き届け、再開と共に最後を見送る事ができ、辛い過去を共に背負ってくれる相棒達が居る。

自分は何て恵まれているのだろうと、ギラムは考えていたのだ。

「でも、主。どうしてそれだけの想いと夢を抱いていたのに、ブレイバーに変えたんですか？ 実力は完璧に把握は出来ていませんが、主にはそれだけの素質があると思います。」

「まあ、確かに今の生き方は小さい頃の俺からしたら少し違うかもしれない。でも今だからこそ出来る事もあるし、本来の力を見せる事のリスクが……少し大きい。でも、俺は良かったと思ってるんだ。この仕事につけたからこそアイツと再開出来て、最後の時まで一緒に過ごせた。親父のことも、ちゃんとケリをつけられたしな。」

「親父さんに……会ったのか？ 主。」

そんな主人の現状に違和感を覚えたのか、リニログリーンは戦闘タイプについて変更した理由を質問した。質問に対しギラムは意見を踏まえ、妙な不一致を抱いたであろう疑問の返答をし、新たな事実を彼等に告げた。

そう、すでに彼は見返すべき相手である『父親』に面会をしに行っていたのだ。その事は同居人であるフィルスターですら初耳の話であり、とても驚く切欠だった。

「ああ。ココに入隊してからしばらくして、一人前に過ごせて稼ぎ頭になった頃だ。あの家に、もう一回足を運んだんだ。惑星モトゥブにある、俺の実家にな。」

「それで、どうだったんだ……………」

主人の初耳話を聞いた二体は顔を声を揃え、決別となった夢についてどうだったのかと問いかけた。するとギラムは少し返答に困る表情をみせながら頬を掻いており、その様子を見た二体は固唾を飲んで返事を待った。そして告げられた言葉は、こうだった。

「……親父に、会えなかった。」

「えっ……………」

返答を今か今かで見守っていたその時、主人から告げられた言葉に二体は声を失った。詳細を聞くと正直に主人は話だし、二人は何があったのかを知る事が出来た。

傭兵として行動していたギラムの父親はすでに他界し、面会した家に居たのは母親だけだったそうだ。無論出迎えた母親は成長した我が子を見て感動の涙を浮かべた反面、父親の話聞いた事に対する悲しみの色も見せた。依頼先でのS E E Dの事件に巻き込まれたのが六年前、ギラムが家出をしナヴァルに勧められた仕事先に通い出した頃。廃品武器の多くが当時亡くなった傭兵達のものだったらしく、詳細を詳しく知ろうとしなかった彼からしても、とてもショックを受ける事実だった。

無論彼が仮に家出をする事無く家に居たとしても、その結末だけは変える事は出来なかっただろう。当時の彼はテクニックを発動する事は出来たとしても威力を極めていた頃であり、下手をすれば自身も死んでいたかもしれない。母親を悲しませる原因に仮になってしまっていたと考えた時は、彼の身体も震えていたそうだ。

人間とは違う原生生物でもない、異世界体の様に存在するS E E D。今だからこそ対抗する術と共に打ち負かす事は出来るとはいえ、それに準ずる存在は身体が恐怖と感じてしまい、彼のトラウマとなってしまっていたのだろう。人でも原生生物でもない、ましてやS E E Dとは違うモノに、彼は恐れる様になってしまったのだ。

【そんな家での決別が変わり果てた姿になった事を知った後、俺の元にやって来た物がある。】

暗い雰囲気にもまれていた自室内を書き消す声を聞いたフィルスター達が顔を上げると、ギラムは少しだけ笑顔を見せつつ手元に武器を召喚した。そこには二人がよく目にする、彼の主装備が姿を現した。

「『アサシンクロス』……………」

「まさかそれが、親父さんの形見だったなんて。」

手元にやってきたツインダガーを目にした二体は口々にそう言い、ギラムのそばに移動しそれぞれがダガーに手を触れた。既に彼の手の中に馴染んだ武器は、思い出と共に決断を背負い混んでおり、彼が愛用する理由が今なら解ると心の中で彼等は呟いた。

「あの時の誕生日プレゼントとして、親父がくれた最初で最後の武器。最終強化をしてまで使いたい、俺の大切な武器……大切な思い出の詰まった、武器。親父のくれたアサシンクロス、お袋から預かったコメツタラック。俺はコレを持って、この仕事を続けようと思ったんだ。」
手にした二つの武器を見つ、彼はフィルスター達にそう言った。その言葉を聞いた二人は同時に頷き、両手を離し武器が姿を消すまで視線を変える事は無かった。

「親父の分まで、俺はこの仕事を続けたい。そしてその金を、俺とお袋、フィルとリニロの生活に。そして、アイツの花園のために使う。そう決めたんだ。」

「主……」

「決めたからこそ、俺は親父に認めてもらいたかった法撃主体の生き方を封印し、ブレイバーにタイプを変えた。本領を抑えてまでも、頑張りたかった。なのに、あんな事になっちゃった……！」

戦闘タイプを変えた理由を彼は説明し終わると、自分が今何をしたいくてこの生活をしているのかを二人にぶつけ出した。彼等は主人の意志を聞きながら静かに頷き、言いたい事を言わせてあげようと互いに眼で合図するのだった。

「皆のため、家族のために頑張ろうとした俺だったのに…… エミリアみたいに、暗い顔をしているアリンに笑顔に戻したいと思った一心でこうやって行動していたのに……！ 俺は皆を傷つけた……！！」

しかし次第に彼の顔色が陰しく変化しだし、徐々に彼の顔が下を向きだす。膝の上に置かれた右肘の先には右手で額と右目を抑えだし、込み上げる感情を懸命に我慢している様子が見て取れた。段々と声が震えだしいつもの彼らしくない様子を見て、フィルスター達は軽く焦りながらもその場にとどまり、気持ちを和らげようと声をかけだした。

「でもアレは！ 主の意思でやった事じゃ！」

「俺の意思に反してでも、やった事には変わり無い！！ 俺は、他人を傷つけてしまった……！」

「そんな事無いですよ！ 主は何もしてないし、俺達も怪我なんてしてなかったんだ！ どうして！！」

「俺の意志じゃなかったとしても、結果的に俺がやっちゃったことに変わりはないんだ……！！」

もう……どうしたらいいのか、解らねえんだよ！！」

だが彼等の声は虚しく書き消され、彼は目元を抑えたはずの掌から涙をこぼし、すすり泣く様に泣き出してしまった。情緒不安定とも思えるその光景にリニログーンは慌てながらどうするか考え、励ますべきか男の涙を視ない様視線を逸らすべきか、必死に考えていた。

その時だった。

ガシッ！

「……？」

静かに泣きだしてしまっただけの腕に、彼の事を支える様に腕を掴む感触がやってきた。感覚を覚

えた彼は掌を退かし腕を視ると、そこには見慣れた緑色のボディが映り、相棒の一人が腕を掴みながら額と角を腕に付けていた。

「主は主だ。……何があっても、主なんだ。」

「……………」

「それは他の誰もが知っている事だけど、俺が一番良く知ってるつもりだ。主は優しいからこそ夢を見つけられて、周りが大切だからこそ夢を封印した。でも失敗して躓いて、今は疲れてるだけなんだよ。」

優しく諭す様にフィルスターはそう言い聞かせ、彼の心が少しでも軽くなる事だけを望んでいた。自身がパートナーマシナリーだからだけでなく、自分が一番大切に思える主人だから。自分の事を受け入れてくれたビーストであって、自分よりも幾多の夢を抱く青年だから。泣き顔何て似合わない、勇ましくも逞しい漢(おとこ)だから。ただそれだけの気持ちで、彼は優しくもしっかりと腕を掴んでいるのだった。

「主は今まで通り生きればいいんだ。いつでも、どんな時も。」

「でも、俺は……………今まで、何も出来なかった…………… 親父を認めさせるどころか、友人達すらも護れなくて…………… 自分の力で、傷つけて……………」

「それはもう終わった事だ、忘れて良いて。……例え主の心をえぐるような残酷な仕打ちが、これからもあったとしても。今の考えを、変える事は無いんだ。」

そう言いながら彼は静かに顔を上げ、主人の涙を指で拭った。普段であればこんなことをしないかもしれない、素直になる以前に優しくなんてしないかもしれない。だけど今の主人にはそれが必要で、俺にはそうする事が出来るかもしれない。

フィルスターはその一心で言葉を告げ、静かに笑顔を見せるのだった。

「ギラムが俺の事を受け入れてくれなかったら、俺は素の性格を出せる事は無かった。ギラムにはギラムにしか出来ない、夢と力を持ってるんだ。絶対に、諦めないでほしい。」

「……そうです。俺も同感です、主。」

そんな二人の様子を見ていたリニログーンも同様に、主人の近くへと移動し優しい瞳を向けた。同様にフィルスターと同じように涙を拭くと、彼は優しく彼の身体にしがみ付いた。

「廃棄決定の俺を救ってくれた、絶対的な新たな主になってくれた。それだけで俺は、主に助けられた。」

「俺達の主はギラムしか居なくて、ギラムにはそんな顔をして欲しくない。」

「……俺達はずっと、

支えたいんだ。ナヴァル(友人達)の分まで。」

「……お前等……………」

二体の励ましの言葉を耳にし、ギラムの眼から再び一筋の涙が流れた。だが今度は彼等に拭って

もらうことなく自身の腕で拭い、少し不格好ではあるが笑顔を見せようと表情を変えていた。

「俺等二体共、主に助けられたから。今ココで主の事を信頼して、最善の仕事をしてる。」

「そして今度は、俺等が助ける番だぜ、主。泣かないで、諦めようとしなくて。俺等と一緒に、今を過ごそうぜ。」

相棒達は口々にそう言い励まし終えると、優しく主人の両手をそれぞれは手にした。自分よりも小さな手が、自分のために行動をしたいと言ってくれている。一方的に頑張る事だけでなく、互いに支えながら生きていこう。

そんな希望を思い出させてくれる小さな翼が、今の彼の眼に映るのだった。

「フィル…………… リニロ……………」

「主は主だ。」

「どんな姿でも、ミスをして、主だぜ。」

「…………… ありがとう……さん。」

優しい言葉を駆けてくれた相棒達の励ましを受け、ギラムは流れる涙をよそに二体を抱きしめた。

夢を抱く事で独りとなり、種族の目指す道を外れた人生を歩んできた。外れた人生の人間を拒む人々が居るこの世界で、変わらずに自分のそばに居てくれた存在達。姿形は様々で、それぞれが育んだ優しさで自分は支えられていた。

改めて思い出した様子で、彼の心は優しく溶かされていくのだった……………

しかし、静寂は突然として打ち砕かれた。

ファンファンファン！！ ファンファンファン！！

『リトルウィング社内に、不審者ヲ確認！ コレより、該当ブロックを緊急閉鎖シマス！』
突如として鳴り響く警報機の音と共に、管内全域に会社受付嬢のチェルシーの音が響き渡った。同時に彼等の居る部屋を仕切る扉の奥からは隔壁が降りる音が聞こえだし、静寂は一瞬にして戦場の余波を感じさせる空間へと変貌し出した。

「チッ。こんな時に、こんな大イベントの場を用意してくれる奴が居るなんてな……………！」
社内に響き渡るただならぬ変化を知らされ、何時の間にかギラムはその場を立ち上がり、涙を拭いながら戦闘準備に取り掛かりだした。抱かれていたフィルスターとリニログーンは慌てて彼から飛び退き、先ほどまでの消極的な一面を感じさせない、普段のギラムが立っている事に気が付いた。

衣服を纏い少々乱暴にタオルで顔を拭くと、彼は巻かれていた包帯を取り除き、ゴーグルを額に付け手元に短剣と短杖を手にした。それはつい先ほど入手経路を話された、思い出の武器達だった。

「主！ 何処行く気ですか！？」

「決まってるだろ。俺の大切な人達を守りに行くんだよ。」

「一人じゃ無理だ！！ 数がどれだけなのか、それすらも図りきれないんだぞ！？」

病み上がりと言う事もあってか討伐任務に行かせたくないリニログーンは慌てて制止させ、扉の奥へ行って欲しくないと叫んだ。しかしそんな彼の制止を聞く様子を見せない主人を見て、彼は両手いっぱい手を広げ、小さい体で精一杯通行を妨げていた。

「主はまだ、病み上がりだ 敵も多いと思うから、止まって欲しい。」

「そんな事は気にしねえよ。今まで俺が数に圧倒されて、退散した事あったか？」

「.....」

「俺はもう、迷わない。過去の自分を捨ててまで、仲間を立てにしてまで逃げようとなんて、もうしない。今は全力で、大切に思えるほど信頼している人達を助ける。それだけだ。」

そんな優しい相棒の気持ちを受け止める様に、ギラムは優しくリニログーンの頭を撫でた。そして静かに一步踏み出し扉を開けると、そのまま廊下を走り出して行ってしまった。

「！ 主.....！！」

優しさを知ってまで出て行ってしまった主人を見て、リニログーンはその場から叫んだ。しかし返事は来る事無く、遠ざかる足音だけが彼等の元にやって来た。

「.....ったく、しゃあねえなああ、主は！！」

体調が万全ではない主人を気にするリニログーンをよそに、彼の後方から声が聞こえだした。声を耳にしたリニログーンは振り返ると、そこには自身よりも大きなライフルを抱えるフィルスターの姿があった。

「フィル.....！」

「俺は主に付いて行くって決めてんだ。何処であろうと、何も出来ねえ時でも..... 俺を認めてくれた主の、そばにいただけだ！！ 無限大の可能性を秘めていそうな、ギラムの元にな！！」白い銃身が眼をひく長銃『インフィニットコランダム』を持ち直し、彼はそう叫びながらギラムの後を追いかけるように駆け出した。身体を気にする優しさを持っていても、彼の意志を曲げる事は出来ない。ならばその優しさを知ってまでも行動を取ろうとする、自分が最も惚れるべき主人の元に居たい。

彼の援護射撃は、そんなマシナリーらしくない想いから来るのかもしれない。

「.....ああもう！！ まだ全然解んない奴等だな！！」

独り残されたリニログーンは苛立ちながらも倉庫へと向かい、フィルスター同様に自身が最も仕えるであろうツインクロウを手にした。煌めきが強く瞳に嫌でも納めたくなる金色が特徴的な双鋼爪『シデミサキ』を装着すると、遅れながらも部屋の戸締りをし、主人達を追いかけるように

廊下を駆け出した。

手助けと努力の時

突如やってきた敵勢により、クラッド6内では襲来に対する迎撃措置を行っていた。隔壁による移動制限を初めとし、各所に設けられた装置を利用して傭兵達による強襲も掛けられていた。

「凍り付きなさい！！」

リトルウィング内に響いた放送の後、支社のあるロビー内では一人の女性が長杖を手にし、果敢にも多勢を相手にしていた。その場に居たのはたまたまりトルウィングに顔を出していた、ガーディアンズ所属の『ルミア』であり、クラウチからの許可と要請により支社前での戦闘を行っていた。お得意の炎属性と氷属性のテクニックを駆使しながら、敵を次々と行動不能状態にしていく。

「ふう。反省点は多いけれど、まだまだ行けますね。エミリアなんかには負けてられません！」
その後一息付いたのも束の間、目の前に見えた敵を補足し、再び彼女はテクニックを演唱する体制に入って行った。

「行っけえ！！」

「うりゃあ！！」

一方こちらは、ルミア同様にロビー内で闘うトニオとリィナ達。夫妻も同様に上司からの要請によって参上し、敵を次々と行動不能状態にしていた。

『小ビースト』と呼ばれる種族のトニオは、普段から使っているツインクローを使い、リィナはその援護として土属性のテクニックを使っていた。またその近くでは、これまた上司の要請によって加勢している2人の新人達の姿もあった。

「期待してるよ！」

「任せろ！！」

同じく社員であるエミリアとユートも連携プレイで相手を圧倒しており、オリジナル武器である長杖と長槍を手に戦っていた。突撃志向の高い彼の動きを視ながら、彼女はテクニックを演唱し、時折味方の傷を治癒しながら全力で応戦していた。既に名の知れた社員達が続々と揃う仲、敵勢は臆することなく襲撃を行って行く。

「邪魔する者は容赦しない！」

「さっさと明け渡すんだなああ！！」

皆が皆、このコロニーをかけたの戦いを行っており、想いは違えどこなすべき願いのために行動を続けて行く。同様にどちらかが怪我をする事も有れど、まだまだ戦いは終わりそうにない空気が漂っていた。

また、社内以外の場所でも襲来による戦闘が行われていた。

ショッピングエリア、社内ロビー、カフェテリア、リゾート施設。全てのエリアには常に社員である凄腕の傭兵達がいるため、敵も一筋縄では行かない戦いを行って行く。どちらが有利、どちらが不利かは解らないが、誰もが懸命に守るべき物のために行動していた。

「停滞する時の中に……… 加速する一撃を！！」

「はい！ ご賞味下さいませ～☆」

ショッピングエリア内で応戦をしていたのは、ギラム達とは別行動を取っていたアリンとメアン達。彼女達のそばにはパートナーマシナリーであるウィンドベルとラスベリーが主人の援護をしており、敵に臆することなく連携を取りながら戦っていた。

前線はハンターであるメアンが切り込み特攻を行い、その後ろをラスベリーが援護射撃をし、アリンとウィンドベルは状況に応じてテクニックを放ち味方の補助をしていた。皆はそれぞれお気に入り武器である長杖『クラッドバストーン』と双手剣『フライパンセット』使用しており、他の傭兵達に劣れ引かない威力を叩きだして行く。もとい、とても響く調理音を奏でて行く。

「僕だってえ！ 力になるんだ！！」

「ロストだぜ！！ お前等！！」

主人が怪我をしない様気を配りながらも、二体のパートナーマシナリー達は加勢し敵の排除に努めていた。新参パーティメンバーとは思えないほどの連携ぶりを発揮しており、敵も臆することなく突っ込んでくるメイドに怯むほどである。とても相手にしたくない戦闘メイドだ。

「エンドか？ ユー達よ。」

「……よし、ココはもう大丈夫ですね。」

その後メイド殺法が幾度となく炸裂し、攻めてきた敵軍を片付け終えた頃。ウィンドベルとラスベリーは周囲を警戒しながら敵がいな事を告げ、主人に次の行動を促していた。同様にアリンも自身のサーチ機能を使用し熱源が居なくなったことを確認すると、メアンの元へと向かった。

「敵は居ません。早く、クラウチさん達の居るロビーに行かないと！」

「OKアリンー！」

その場から移動し次の敵を排除する事を告げると、四人は駆け出し目的の場所へと向かって行動を開始した。

二人が目指していた場所、それは本社を構える住居区前のロビー広間だ。そこに敵が集中しているという報告も受けており、彼女達はそこへ向かう途中だったのだ。広間から住居区へと通ずる通りに出てしまえば、療養生活を終えたばかりのギラムも居る。

まだ完全復帰していないリーダーの事が、彼女達は何よりも心配だったのだ。

『ギラムさん……… どうか、無事で居て下さい……』

心の中でアリンはそう願ひ、今はこの場にはいないギラムの身を案じていた。

一方その頃.....

ピッピピッピッ

「どうだ、いけそうかフィル。」

パーティメンバーから心配されていたリーダーのギラムは、社内ロビーと住居区の間を封鎖した隔壁で足止めを喰らっていた。安全と被害拡大阻止のために行われた行動であったが、そこから移動し参戦するつもりだった彼等にとって、今はただの邪魔に過ぎない。そのため、ハッキングを得意とするフィルスターが本社のパソコンにアクセスし、一部解除の申請を出していたのだ。

「ちとガードが堅いけど、大丈夫。もう少しで開けられるぜ。迎えはどうだ、リニロ。」

「後方からの敵影は無し。隔壁が閉まっている事もあって、どうやら保護されたのは自分達だけみたいですね。」

「あとは、休養中の社員がちらほらってところだろうな。俺と同じで。」

「だろーな。」

普段通り端末を操作しながら、フィルスターは平然と主人のためにと行動を続けて行く。本来であればあまり好ましくない手段ではあるが、基本的に彼は主人が求める情報を得るためならば、どんな事でもこなすだけの力を持っている。無論足跡を残さない所も主人の為であり、彼には人権そのものは薄いため、全ての罪は主人に向かってしまう。それを何としても阻止したく、なおかつ主人の役に立ちたい一心なのだ。

同様に彼と同じ心を抱くりニログーンは、辺りを警戒し不意の敵襲に備え武器を構えていた。敵がうろついてるのは隔壁を抜けた先ではあるが、病み上がりの主人に無理はさせたくない。ましてやこの後行おうとしている事によっては、普段よりも疲労感の絶えない行動かもしれない。それだけの事を、ギラムは行おうとしているのだ。

『.....皆、無事だと良いな。』

隔壁が開くまでの間、彼は隔壁に背を預け、体力を温蔵しながらその場に居ない仲間達の事を考えていた。そんな時だ。

「なあ、主。決意に水を差す様で悪いんだけど、聞いても良いか。」

「ん？ 何だ？」

疲れとは違う休息を取っていた主人に対し、フィルスターは両手を動かしながら声をかけた。不意の発言に少し驚きながらも彼は返事をし、視線を降ろし見下ろしながら彼を視た。

「主がやるって決めた事だから、俺は口出しはしたくない。でも主がやろうとしてる事って、前に念願叶って見つけた【アレ】を使うって事だろ？ 良いのか、そんな事して。」

「『そんな事』って、案外フィルは否定派なんですか？ あれだけ言って自分よりも堂々と出て行ったのに。」

「そうじゃねーよ。俺が心配してるのは、それを行った後の『主の扱い』が酷くならないかって

事の心配だ。」

「扱いが酷く……？ 何処がですか？ テクニックを極めたビーストの主が居れば、とても心強いじゃないですか。」

「そうじゃないぜ、リニロ。フィルが言いたい事はな。」

「主？」

彼が気にしていた事に対しリニログーンは突っかかるも、ギラムは何かを理解している様子でフィルスターの発言に対し弁解した。軽く驚く彼ではあったものの主人と先輩の間では理解している事の様子で、リニログーンは話を聞く体制に移行し、耳を傾けた。

「フィルが心配してるのは、その頃の『俺』があったからだ。フォースで登録したのはリトルウィングも同じで、同様に社内での蔑視もあった。ゆえに、本領を発揮させた俺が辺りの考えを根こそぎ変えちまえば、それによる『憧れ』と『憎しみ』が出るって思ってるんだよ。」

「憧れと、憎しみ……」

「同タイプのフォースからは憧れの眼差しで教わりたいって思うかもしれない、反対にハンターからは打たれ強いフォースが居れば頼もしいって思うかもしれない。でも、全員が全員そう思うとは限られないんだ。俺は全員を護る事は出来ないかもしれないし、例え護れたとしても、相手が傷つく事もあるかもしれない。全部が全部、俺には変えられない。フィルは憎しみの眼差しが俺に向けられて、今まで頑張ってた俺の事を心配してくれてるだけなんだ。だからこそ、公開していい部分とそうでない部分を、再確認したいんだよな？」

「ま、そう言う事。」

フィルスターが気にしていた事、それは後のギラムが受ける扱いに対する事だ。本来の力を抑えていた戦闘スタイルを解禁すると同時に、彼にはある秘蔵の武器を隠し持っている事実がある。だがそれを知っているのは自身と相棒のフィルスター、そしてリニログーンだけであり、その武器による威力は自他共に動揺を隠せない程のものだ。力を見せつけられた存在達はどのような反応を示し、どのような扱いを今後して行くか、フィルスターの中では幾つかの仮説が思い浮かんでいた。

主人にとって望んだ未来となる仮説もあれば、全く逆で再度夢を壊されてしまうかもしれない仮説も存在する。ましてや自分達ですら驚いた武器を解放するとなれば、仮説を遥かに超えた扱いを主人が受けてしまうかもしれない。少し過保護すぎる考えではあるが、フィルスターは心配するだけの事態に直面した事があるため、他人事ではないのだ。

主人が辛い事は自分にとっても辛い事であり、笑うようになった主人が再び笑わなくなってしまうかもしれない。それはパートナーマシナリー達にとって視ればとても辛い事であり、自分達ではどうする事も出来ないかもしれないと、自身のプログラムにすら違和感を覚えてしまう。その点はフィルスターには微量の心配程度ではあるが、やはり友の苦しみは彼にも辛いのだ。

「アレを持ったら、主はきっとこんな騒動何てまるっきり書き消せるだけの事柄がぜってー一出来ると思う。それだけの力を持った社員がリトルウィングに居るって解れば、依頼も殺到するだろうし主は一躍人気者。でも、それを利用する奴だって少なくない。英雄は何時だって、苦勞が絶えねえからさ。」

「そうだったんですか。……でも、フィルは英雄じゃないでしょ。」

「うっせっ！ 俺は主の補佐が出来ればそれでいいんだっ 主がやって欲しい事は、ぜえーんぶやってやらあ！ 初任務も初体験もどんと来い！」

「地味に如何わしいです。」

とはいえ、ツンデレな彼の発言は何処となく危ない発言になるようだ。根っからの発言ではあるが捉え方次第では危ない子であり、ギラムは理解しているため何も言わないが、初見でこんなことを言われてしまえば信頼以前の問題だ。リニログーンに突っ込まれてもフィルスターは鼻を鳴らしながら誇らしげに胸を張っており、主人が大好きなのが良く分かる瞬間であった。

「フィル。お前の心配は解ってるし、俺もそんな気がしなかったわけじゃない。でも俺は、どうしてもそれが必要だと思ったら、迷わず使うぜ。使わなくて済むならそれで良いし、それでも駄目なら出し惜しみはしない。それだけの手段を手につけて、後はどうだろうと俺にはお前等が居る。昔と違って、今は怖くないぜ。」

「そっか。」

二体の相棒のやり取りを聞いた後、ギラムは膝を曲げ右手を動かしながら彼に想いを告げた。自身がその気になれば即座に終わらせる事は出来るが、それは最終手段であり公にするかどうかは彼も迷っていたのだ。

自身の夢を叶えられると同時に、今の環境を壊すかもしれない未知の武器。彼が出す事を望めば瞬時に右手に収まってくれるであろうその武器は、彼等は手にした後からしばらく倉庫に眠らせており、つい先ほどそれをどうするかと考えながら持ち出してきた。誰も解明する事の出来なかった物質で構成された、超常現象であるテクニクを計り知れない力に変える長杖。彼もまだ使いこなせているかさえ解らない代物を、これから使おうと思っているのだ。

そんな主人の言葉を聞いて、フィルスターは両手を動かすのを止め、ゆっくりを主人の顔を見ながら微笑んだ。

「じゃあ、俺はこのまま主のそばに居るぜ。主が居なくても良いいって、言うまでな。」

「自分もです、主。さっさと片付けてしましましょう。」

「ああ、そうだな。」

三人はその場で決断を改めて口にする、ロックの解除された隔壁が徐々に開き出して行った。一つ一つ開けて行くその先には、彼等の目指すロビーが待っている。

「行くぜ！！」

「おう！！」

敵が待っているであろうその場を目視すると、ギラムは左手に短銃を装備した。フィルスターと同じ白を基調とした短銃『サーペンティン』は、比較的大きい彼の手と体格に合った唯一の代物だ。何かと銃器を扱う事の多い彼にとってみれば最高の代物であり、フィルスターとお揃いに等しいその武器を彼はとても気に入っていた。

自身が大切にしている仲間を、自身が叶えたかった力と戦闘で変えて行く。そのために、彼は世間を揺るがすほどの決別を行うのだった。

導きと行動の時

クラッド6を丸ごと襲撃してきた集団との応戦を開始し、しばらく経った頃。徐々に戦状がリトルウィングの人々に傾きだし、そのままの状況が続けば鎮圧されるのも時間の問題だと思われた。

しかし、

「クッ……！！　こんな所でっ！」

「くそったれが……！！」

社内周辺ロビーでは、鎮圧がほぼ完了し優勢だと思われていた他のエリアに反し、劣勢となっていた。その原因と呼べるのは新手の登場であり、急遽参戦していたルミアとクラウチですら追い込まれていたのだ。

二人から少し離れた位置ではエミリア達が住居区前の隔壁を護っているも、守るので精一杯の状態だった。

「ハッ。名前の知られている傭兵達がこんなんじゃ、この会社も終わりだなあ。リトルウィングさんよ。」

「貴方達！　こんな事ヲシテ、タダで済ムト思ッテルノ！？」

彼等を打ち負かした親玉は長銃を肩に担ぎながら言い放ち、辺りを見渡ししながら自身に有利な状況になっている事を確認していた。初めは襲撃したのにも関わらず劣勢だったため増援を考え、司令塔そのものが前に出てきた事によって勢いが代わり、あっという間に風向きが変わってしまったのだ。

クラウチの手当てをしながらチェルシーは叫ぶも、相手は聞く耳を持ち合わせていなかった。

「お前らみたいな奴等が居ると、こっちの仕事は減る一方だね。なにせ依頼の終着点がココって言われちゃあ、俺らも黙ってるわけには行かないんでな。」

薄汚れた黒いローブを纏った親玉は彼女を睨み返しながらそう言い、二人が動けなくなった事を再確認し辺りに叫んだ。

「さあ、後は会社本部を制圧するだけだ。ザコ共の相手は任せたぞ。」

「OK！　ボス！！」

指示を聞いた敵軍は声を揃えて返事をし、再び社員に襲い掛かろうとしていた。発声後の威圧感が増した事により、エミリア達は徐々に隔壁側へと追いやられ、どうしたら敵を撃退出来るか考えていた。

それぞれの戦闘力は左程高くはないとはいえ、数による優劣だけは中々拭いきれず、連戦による疲労感もある。戦いそのものを得意とするトニオとユートですら息切れが目立っており、エミリアに関しては長杖を握る手が震えてしまうほどだった。

「こ、こんなのやだあ！！　敵が多過ぎるう！！」

目の前に群がってきた敵を見つつ、エミリアは降参に近い悲鳴を上げた。自身が四人に対し相手は軽く二桁の軍勢であり、ルミアとクラウチが動けない以上、自分達しか敵を負かせる事が出来

ない。だが自分達と共に戦う傭兵達は皆疲労困憊であり、リィナに関しては妊婦のためフットワークも鈍っている。

自分達が負けてしまうのは、もはや時間の問題と思われていた。

「僕だって、こんなに大勢を相手出来ない！」

「リィナに手出しさせねえぞ！ お前等！！」

「こんな所で、アタイ達が降参するわけ無いんだからね！！」

だが他の三人は諦めている素振りだけは見せず、勢いだけは負けない様にと声を発した。無論それがやせ我慢に等しい咆哮のため相手はひるまず、各々が武器を構え何時でも襲える状態になっていた。

「じゃあ仕方ないな。消えろ！！」

敵軍の一人がそう言うと、一齐にエミリア達に襲い掛かった。室内灯の灯りすら隠してしまうほどの強襲を眼にし、皆は怯み動く事が出来ない。

「イヤァァァー！！！！」

どうする事も出来ずにエミリアは耳を塞ぎ、悲鳴交じりに叫んだ。その時だった。

「諦めるのは早過ぎだぜ！ お前等！！」

ガシュンッ！！

シュパパパンッ！

「！！」

声と共に聞こえた金属音と銃声が止むと同時に、エミリアは眼を開け前を視た。すると先ほどまで襲い掛かろうとしていた敵軍が、立っていた位置よりも少し後ろに仰向けの状態で倒れており、一部の敵勢は驚愕を露わにしていた。一体誰が一瞬にして片づけたのかと思い、彼女は後ろを振り向いた。

そこには閉まっていたはずの隔壁が開け放たれ、中から援軍としてやって来たであろう傭兵と二体のパートナーマシンリー達の姿。彼等を護ったのは短銃と長銃によるチャージショット、そして双剛爪による護りだったのだ。

「お前！！」

「ギラム！！」

「主以外にも、俺等みたいに戦えるマシンリーは居るんだぜ！」

「もちろん、全ての指示は主のみ！」

開け放たれた住居区から出てきたフィルスターとリニログーンは互いに武器を構え、宣戦布告とばかりに周囲に向かって叫んだ。彼等の間に立っていたギラムは左手で持っていた短銃を静かに

降ろし、四人が無事である事を確認した後、周囲を見渡した。

顔見知りの友人と上司達が怪我をしているも、敵勢の一部を打ち負かしている現状。どうやら戦状があまり良くない事を察し、彼は早めに助けに来られた事を静かに喜んでた。

『助ける事が出来た奴も居るが、やっぱり全員は助けられてねえな……… ……でも、今は護れた友人達が居る事だけでも素直に喜ぶか。』

「ん。新手のお出ましか。」

敵勢の勢いに乱れが出た事を察し、敵の親玉は社内に向かう足を止めた。その眼は静かにギラムに向けられており、双方のマシナリーと共に敵勢の攻撃を防いだのだろうかと静かに目測を立てだした。

「お前か、この騒動の現況は。」

「そうだとしたら、どうするんだ。」

二人の男達の視線がぶつかり会いながら互いを認識し、早急に討ちのめさなければならない相手である事を同時に察した。それと同時に周りに居た人々の目線が集まりだし、彼等の勝敗が戦状に影響すると確信しだした。

「もちろん、早々に退散を願おうか。……だがそうは、してはくれないんだろ？」

「当たり前な答えだどうやら、お前を倒せば事が早く済みそうだ。リトルウィング内の稼ぎ頭の一人『ギラム・ギクワ』とやら。」

親玉は彼のデータを軽く所有しているかのような台詞を吐き、静かに足の向きを彼の方へと向け出した。同時に担いでいた長銃を静かに下ろし、相手の動き次第ではすぐさま発砲できる態勢に入った。

『敵勢の大將は、アレで間違いありません。フィルと同様、レンジャー体質の銃器所持者です。』

『レンジャーか、了解。』

そんな親玉を目にしたリニログーンは即座に相手の体質を見抜き、小声で主人に報告し気を付けるべき点を即座に伝達した。彼の言葉を耳にする間もギラムは目線は変えずに小声で返事を返し、彼もまた短銃のトリガーに再度指を添えていた。

「ギラム……」

「ココは俺に任せな。エミリア達はルミア達の救護をしてくれ。」

心配そうに見つめてくるエミリアを見て、彼は彼女達に次の行動を促した。疲労困憊の友人達を再び戦いに巻き込むわけには行かない、彼はそう判断した安全策だった。

「お、俺も戦うぞギラム！！」

「大丈夫だユート。今まで戦ってくれていただけても十分助かってる。……今は、俺にやらせてくれ。」

しかしそんな彼の策を振り払い、ユートは援護すると言い出した。だが共に戦うと言ったユートに対してギラムは返事を返し、自分がやらなくてはいけない部分がある事をそれとなく話した。

「大丈夫だ、アイツには何か考えがあるんだろ。」

「療養後に出てきてくれたって事は、絶対なんとかしてくれる。今のアタシ達じゃ、多分足手まといだから。」

それを聞いた彼は少々返事に迷っていたが、隣に居たエミリア達が彼を説得しその場を離れる事を決意した。

「……わ、わかった。」

彼の決意と周りの説得を聞き、大人しくユートは外部班に回りだした。四人がその場から離れ安全圏へと退避した事を視ると、ギラムは持っていた短銃から別の武器へと持ち替えた。

彼の手元にやって来た武器、それは今まで使用していた中で彼の手にマッチした長杖『サテライタイザー』だった。ロッドの先端にはフォトンとは違った物質で構成された結晶石が付いており、長槍同様の威圧感を与える武器だった。

「嘘っ……！ ギラムさん！！」

「ギラム！！ 何考えてんだ！！ ビーストがテクニックで勝てるわけねえだろ！！」

そんな彼の持ち出した武器を目にしたルミアとクラウチは次々に叫びだし、彼に武器の変更を要求した。彼の所持している武器は長杖以外にも使い込んだ双小剣『アサシンクロス』があり、即座に懐に飛び込み勝敗を決める事は彼に出来ると思われていた。

ゆえに力がある上での武器チョイスには、皆は納得していない様だ。

「ほお。ビーストがテクニックとは、馬鹿げた考えを持つ奴もいたんだなあ。」

敵の親玉は現れた相手の武器を眼にし、武器を長銃から機関銃へと持ち変えた。一撃の威力で相手を仕留めやすい長銃では、テクニックとの相性が悪いと考えたのだろう。連射性の高い攻撃を与え続ければ、いずれ倒れると判断した様だ。

「射撃武器の中で最高速度の攻撃を誇るマシンガンに、お前は耐えられるか？」

「ああ、絶対に勝ってみせるぜ。手を抜いた事、逆に後悔させてやるよ。」

「フッ、面白い。」

互いに選択した武器による会話を交えた後、二人は体制を変え戦闘モードに入った。もちろんそばにいるフィルスターとリニログーンも本気モードとなっており、手にした武器でいつでも加勢出来る状態に入っていた。

その時だ。

「フィル達は、ココに居てくれ。」

戦う直前になって、ギラムは体制を低くしフィルスターとリニログーンの耳元で囁いた。言葉を聞いた二体は一瞬驚きながらも言葉を理解し、体制をそのままに静かに呟いた。

「主。本当にいけるんだな。」

「ああ。……それに、もう隠すのは止めだ。俺の修行の成果、アイツと共に見ててくれ。」

「解った。」

互いに言葉を呟きながらフィルスターは納得し、リニログーンも同様に首を縦に振った。それを目にしたギラムは軽く笑顔を見せたのも束の間、表情を元に戻し大地を蹴った。

「「覚悟！！」」

バツ！！

長杖と機関銃による戦いが、切って落とされた……

逃げず戦うと決めた時

突如始まった、本社前ロビーでの一騎打ち戦闘。リトルウィングの稼ぎ頭の一人として数えられる傭兵と、襲撃を駆けてきた軍勢の親玉。互いが手にした武器での戦闘が、繰り広げられていた。

「ハハハハッ！！ この攻撃から反撃の時を伺えるかなああ！！」

「もちろん。そのつもりだからこそ、ロッドだ！！」

周囲に退避させた部下と社員達を尻目に、親玉は機関銃の弾丸を連射しギラムに絶え間ない攻撃を仕掛けた。飛んでくる弾丸を見た彼はその場から回避し、その後も飛んでくる攻撃に対しては長杖を盾代わりに防いでいく。現状では一方的に攻められてしまう場ではあったものの、隙を突いて彼は前へと進み長杖を構えた。

「閃光の雷撃！！」

敵との一定の距離へと到着した彼は演唱を開始し、その場から雷を相手目掛けて落とした。周囲に轟雷が鳴り響き、上空が光ったと同時に攻撃がやってくる。

「ハッ！ 甘い！！」

しかし巨大な落雷を目にする以前に相手はその場から退避し、再び攻撃を開始しようとした。その時だ。

バッ！

「遅いぜ！！」

「何！！」

攻撃を避け対象を目視しようとしたその時には、すでにギラムが親玉の背中を取っていたのだ。何時の間にも移動したのかと驚いたのも束の間、すぐさま相手の手の動きを眼にし機関銃を盾代わりに横持ちした。すると彼の動きを視つつもギラムは長杖で相手を殴り、即座に身体を捻りもう一撃とばかりに相手を叩いた。

しかしそれも相手のガードによって防がれた事を視ると、彼は右足に体重を駆け、思い切り左足を蹴り上げた。

ガンッ！！

「なっ！ しまった！！」

不意にやって来た蹴りによってガードが崩され、親玉が持っていた機関銃が空を舞った。武器が手元から無くなり焦った敵は前を視ると、振り上げられた足がそのまま自身目掛けてやってくるのを見て、即座に左へと避け地面を転がった。強烈な力カト落としが外れるもギラムは冷静に演唱を開始し、相手と上空目掛けてテクニックを放った。

「請謁(せいえつ)なる伝令！！」

放ったのは光属性の矢であり、幾多の攻撃が親玉目掛けて再び上空から降り注いだ。それを見た相手は転がりざまに手元に武器を召喚し、両足を曲げ身体を全て榴弾銃の裏へと隠した。それと同時に矢は相手の榴弾銃へ全て降り注ぎ、幾多の貫通した後を残して武器の機能を停止させた。

『クッ……！ 武器が使い物にならない威力だと……！』

慌てた親玉は壊れた武器を破棄し後方へ退避すると、先ほど飛ばされ落下したであろう機関銃の姿を探した。しかし辺りを見渡すも人の影しか見つからず、武器の姿が無い。

「お探し物は、あれか？」

「？ ……何！？」

そんな相手の様子を見たギラムはワザとらしく問いかけ、ある方向を視る様首で促した。彼の動きを見た親玉は、相手に警戒しながらも即座に指示した場を見上げ、仰天した。

彼が見た先にはショップエリアの看板と屋根があり、機関銃は丁度看板の溝の間に縫い留められてしまっていたのだ。先ほどギラムが上空に飛ばした矢は相手だけに放った物ではなく、飛ばした武器を再度使われない様に施すためだったのだ。矢によって運ばれた機関銃はそのまま看板の溝の間に弾き飛ばされ、現状の様になっていたのだ。

「……………」

「悪いが、飛ばした武器を再度使わせないぜ。お前等は俺の大切な友人達を、傷つけ過ぎた。」

「……フッ、まさかここまでやれる相手だとはな。先ほどの言動は、ある程度撤回しようじゃないか。稼ぎ頭。」

「武器の選択に手を抜いた事も、だろうな？」

「ああ、もちろんだ。」

軽く戦い方に異例さを覚えた様子で、親玉は苦笑しながら玩具を見つけたかの様な不気味な笑みを見せた。しかしそれを見たギラムは左程動揺した素振りを見せないまま発言を撤回させ、再び体制を整え武器を構えた。

「……ならば、俺を完全に再起不能にさせるくらいの事くらいはするんだろうな。稼ぎ頭。」

「さあ、それはどうかな。俺はただ単に相手を仕留めるって言うのは、割と嫌いな方なんでな。相手を意気消沈させる敗北は、割と好むけどさ。」

「ほう。身体よりも精神面での屈服を俺に与えるか。面白い、やってみせろ……………！ 出来るものならなああ！！」

どうやら相手の気合に完全なスイッチが入った様子で、親玉は再び別の武器を手にし攻撃を仕掛けだした。それを見たギラムは後方に下がりつつ右へと走りだし、武器を長杖から短杖と投刃へと持ち替えた。

親玉が次に手にした武器は光線砲であり、連射性は無いものの光線による貫通性のある攻撃を開始した。撃ち放たれた光線は直線に飛び、そのまま壁や床に当たるまで攻撃の手を止めない。それを見かねたギラムは右手で手にする短杖で演唱を開始し、周囲に向けてテクニックを放った。

「氷滝(ひょうろう)の畔(ほとり)！！」

バシュンッ！！

放たれた氷属性のテクニックは床を這い、エミリア達の目の前に氷壁として形作られた。怪我を負ったルミアとクラウチの前にも壁として展開され、数撃ではあるものの相手からの猛攻を防げる手立てを造り上げたのだ。そんな彼の施しの前へと飛んできた光線はそのまま氷壁に当たるも、氷の中で幾多の屈折を受け徐々に威力を失い、壁の中で消え去った。

「悪いが、仲間には手出しはさせねえよ！！」

バツ！！

一部の攻撃が仲間に向けられ無力化された事を目の当たりにすると、ギラムは吠えながら武器を構え、左手に持たれた投刃を振りかざした。既に走りながらチャージショットの準備を行っていた様子で投刃自身が光っており、彼は何かを放つかのように武器を三度振り放った。

投刃からは小さな閃光が周囲に飛び交うも、肝心の弾丸の姿が見えない。

「……ハッ、何をするかと思えばこけ脅し」

「それはどうかなっ！！」

ブワッ！！

「かっ……！！！」

数秒の空白を抜けた先で、突如親玉の足元の空間に変化が起こった。親玉が立つロビーの地面付近から次々と白い閃光弾が吹き上がり、足元からは三発の羽根を模した弾丸が相手を襲ったのだ。狂風と共にやってくる攻撃を受けた相手は武器で攻撃を防ごうとするも、飛来してきた羽根によって再び武器が空を舞った。

無論その隙を見逃さないギラムは武器を長弓へと持ち替え、弓に力を入れて光線砲に向けて攻撃を放った。一発放たれた攻撃はそのまま光線砲を撃ち抜き、武器は上空で爆発し周囲に破片と煙幕をまき散らした。

「クッ！！」

飛来する機械片と煙幕によって視界と空気が淀み、親玉は咳込みながらも口元を塞いだ。その時だ。

「まだまだああ！！」

「！！」

長杖を構え周囲の空気を吹き飛ばしたギラムが目の前で構えを取っており、親玉は接近された事に驚きを隠せず再びガードを取ろうとした。だが今度の一撃は相手の方が少し早く、飛び込んできたギラムの右足が彼の腹を捉え、そのまま親玉は宙を跳び地面へと落とされた。

「グフッ…… クッ……」

「……………」

痛む腹を押さえながら親玉は起き上がり、目の前に立つギラムを目視した。長杖を持ちながら立つ青年はしっかりと相手の姿を捉えており、負けを認めるまでは攻撃の手を止めるとは思えなかった。つい先ほどまで油断していたため、武器を両手で使える物に切り替えたのにも拘らず、先ほどからずっと劣勢が続いている。射撃速度でも一撃による攻撃でも相手を負かせず、次々と使える武器を削って行く。

とてもビーストとは思えない程に、テクニックの使いに相手は慣れていたので。

「もう諦めな。この会社は、お前等の手には堕ちない。」

相手に敗北を認めさせるように、ギラムは言動をかけた。その時だ。

「……フッ、それは………どうかな！！ やれ！！」

「「ハッ！！」」

「！！ 主、後ろだ！！」

「何っ！」

即座に周囲の空気に変化し、突如彼の背後から榴弾銃による手痛い一撃が飛んできていたのだ。遠くから見守っていたフィルスターは慌てて長銃で撃ち落とそうとするも、攻撃の速度が間に合わず弾丸はギラムの背中に命中した。

「ぐああっ！！！」

攻撃をもろに喰らった彼は、そのまま親玉を飛び越えカフェエリアに下ろされた隔壁へと激突した。衝突の衝撃で一時的に壁に留まっていた彼はそのまま床へと落ち、痛みに耐えながらも起き上がろうとした。

しかし。

「舐めるなよ傭兵風情があああ！！」

「！！」

吹き飛んだ先での隙を見逃さず、親玉が武器を持ち替えこちらに特攻を仕掛けてきたのだ。慌てた彼は左手に大盾を持ち守りを固めるも、相手は大盾を足で蹴り飛ばし、彼のガードが壊れた状態で胸ぐらを掴み、ロビーの中央目掛けて投げ飛ばした。そして持ち構えた長銃の弾丸を上空目掛けて発砲すると、撃たれた弾丸は放物線を描いてギラムの身体の上に振り注いだ。

「がああはっ！！」

「主！！」

「ギラム！！」

敵の卑劣な戦法によって崩された戦状を視て、リニログーンとエミリアは駆け寄ろうと立ち上がった。だが、

「来るなっ！！」

「ッ………」

攻撃を受け身体が痛む中、ギラムは寄ろうとする仲間達に対し制止の声を放った。声を聞いた二

人は即座に走るのを止め、焦りながらも彼の無事を祈った。

全ての真実を告げた時

敵の動きを見かねたりニログーン達が止まったのを視て、ギラムは両腕に力を込め身体を起こした。元々病み上がりな状態からの戦闘だったためか、身体の調子が万全ではなく相手の威力がとても手痛かった様だ。身体を起こすのがやっとの様子で、寄ってくる親玉を目にした。

「ハッハッハッ！！ 我々が落とす為ならば、手段を選ばんのだよ！！」

「クッ……………」

「確かに稼ぎ頭の実力は認めるが、まだまだ甘いな。病み上がりの状態で出て来るとは、無茶が過ぎる。」

「……………」

「…………… ふんっ！！」

ガスッ！！

「ぐはあっ！！」

「おらおらおらおらおらああ！！」

「があはっ！！ ぐはああっ！！」

起きた瞬間を狙ってか、相手は彼のボディに蹴りを入れ、その後も幾度とない攻撃を加え始めたのだ。これにはギラムの身体も堪えた様子で、苦しそうに悶えながらも必死に攻撃に耐えていた。

「……ハッ。もう何を思って来たかは、どうでも良い。俺を此処まで追いやったお前だ、しっかりと止めを指させてもらおうか。」

チャキンツ……

「！！ ギラム！！」

「駄目……だ………！ 来るなっ………！！」

「でもっ！！ このままじゃ！！」

「駄目だ！！」

「ッ……………」

とてもではないが見ていられない状況が続き、エミリアは短杖を持って駆け寄りたい気持ちで一杯だった。だがそれでも寄っては行けない事を告げられ、齒がゆい気持ちで彼を見つめる事しか出来ない。

同様に他の社員達もそれぞれが回復用にテクニックをリンクした武器を持つも、彼女同様に動く事が出来なかった。周りは敵対する集団がそれぞれの武器を持ち、自らが無防備な状態で領域に踏み込めばどうなるか。ただでさえ動けそうにないギラムに対し攻撃の嵐が来ようものなら、その時点で彼の命が危ない。

逆に自分達が怪我をしてしまえば、ますます彼の負担が増えてしまうのだ。再び劣勢に持ち込まれてしまった事を知り、誰もが動く事が出来ずに居た。

「……………」

「この状態になっても、仲間に手出しはさせようとしなないか。相当な強情者だ、さすがはビースト。」

「……………言いたければ、好きに言えばいい。俺はどんなに言われようとも、その事実だけは変えられねえ…………… だが、なあ……！」

ヒューツ……………

「？」

傷付きながら仲間達に手出しさせないで居た、その時。左手で腹部を抑えながらも右腕で身体を起こし、発言し続ける彼の言葉に反応してか、周囲に妙な違和感が漂い出した。

「こんな状況になっても、俺には……！！ 護りたいモノがあるんだっつってんだよ！！ ナメるんじゃ……………！ ねええええ！！！」
彼がそう言い放った、まさにその時だった。

ガシュンガシュンガシュンッ！！

「なっ！！ 何だ！！」

突如瞬間氷結された空間に氷の結晶が生成され、傷ついたギラム目掛けて幾多も降り注いできたのだ。これには何が起こったのか解らない一同が混乱する中、彼は氷の中に閉じ込められてしまった。

「氷が……！ 降って来た……………！？」

「い、一体何処から降って来たの！？ コレ！」

その場に居た人々は、皆慌てながら辺りを見渡すも、超常現象を放った張本人を見つける事は出来なかった。先ほどまでボロボロだったギラムの手には法撃武器も握られておらず、本人が放ったとも思えない。では、何処からだろうか。

「……！！ ギラムさん！！」

「えっ……………！ ギラムー！？」

そんな混乱の場へとやって来たのは、この場へと向かっていたアリン達一行。事態の状況を把握するどころか顔見知りの相手が氷の中に閉じ込められているのを視て、彼女達は慌てふためく事しか出来ないでいた。ウィンドベルとラズベリーですら動揺しており、何がどうなっているのだ

ろうかと言う状況だ。

「フィル、どうなってるんですか！ ギラムさんが氷漬けて！！」

「違う……… これ………氷漬け、じゃない！！」

「じゃあ、何だと言うのだ！？ ユーは！！」

「………」

その場に居たフィルスターに状況がどうなっているのか説明を求めるも、彼もまた別の混乱による動揺を処理している最中の様だった。彼にはそれが何なのかを理解してはいるものの、どう説明したらいいのかが解らないのだ。

テクニックを放つ際に必要な法撃武器を使わずに空間を変化させ、自らを取り囲み消えない氷刃で領域を生成する力。その空間で何が起きているのか、説明を求められても出来ないのは当然だ。

この世界では存在しない、未知数を含む力。

その力が発動したのだ。

『コレ、ガチでアレだ……… 主、本気でやる気だ………！！ マズイって、いくらなんでも！！』

手に握られた短杖に力がこめられ、次第に彼は両手で握りしめるほどに恐怖を感じていた。事前にどうなるかを確認したがゆえに、自身と相手は覚悟をしていた。だがそれを行えばどうになってしまうのかは両者共に解っており、再び同じ過去の末路を辿る事になるかもしれない。

今まで一生懸命に頑張ってきた、前向きな心さえも壊してしまう、苦しみの蔑視達。ひとたび変わってしまえば、それが当たり前になってしまう負の感情。フィルスターはその恐れと、目の前に広がる力の威勢に、圧されている様にも見えた………

そんな恐怖を相棒が抱いていた、目先の力の中では。

氷の中に閉じ込められた青年が、ある夢を視ていた………

『………』

それは、何時だった頃かも解らない夢の中。彼が一度だけ視た、見知った場での、見知らぬ存在をみかけた夢。森林地帯と思われる空間から開けた、砂地の広がる不安定な大地。空は晴れているのか曇っているのか解らない程に、視界は白く霧に包まれた不確定な気候。青年であった彼が見たその中で視た、ある存在。

【………】

『？』

【………】

相手を視かけた彼は不思議な眼差しを向けるも、相手は何かを口にする事は無い。白くもあり蒼くもある、透き通りそうな程に光沢がある身体と、何かを見つめる鋭い眼差し。霧の中でも風が吹き荒れ、鬘と思われる毛と長い髭を持った、大きな蛇龍。

身体全てを捉えられないその空間で、彼はその龍を視る事が出来た。だが相手との話をする事は、無かった。彼がそう、思いこんでいたからだ。

《アレと俺とでは、違いが大きい存在》だと。

口を聞いて良いのかさえ、解らなかったのだ。

「……………」

そんな夢を思い出しながら、彼はゆっくりと眼を開けた。視界が氷に入り込んだ光で周りを把握する事が出来ない中で、彼はある感覚を感じ取った。身体を動かす事が出来ないでいるその中で、自分の近くに何かが居る。だがそれを目視する事が出来ず、ただ感覚で悟る事しか出来ない相手。

その感覚に、彼には覚えがあった。

【我を呼ぶ…………… 汝、か。】

『声……？ ……………誰、だろう…………… ……声は、知らないのに……………知ってる…………… 何処かで……………』

【汝は我を呼ぶ。我は汝に、呼ばれた。汝は我を視れず、我は汝を視ていた。】

『……………』

【呼び覚ますか、この感覚を。汝は求めるか、我を。】

『……………知ってる。この感覚、俺は……………知ってる！！』

感覚と頭の中に響く声を聞き、彼は心の中でそう叫んだ。その時だ。

パキンパキンッ！！

彼を取り囲む大きな氷にヒビが入り、辺り一面に対し漏れんばかりの冷気が漂い出したのだ。氷を視ると冷気が目に見えて確認できるほどに溢れており、瞬時に当たりの存在達にも異変を与えだした。

「……？ 部屋の空気が……………」

「何か寒いよー？」

その場にやって来たメアンが両手で腕を擦り寒さを訴える中、アリンは辺りに流れ出した冷気を眼で追っていた。少しずつ辺りの温度が下がって行くのを存在達は感じだし、各々が体温を保とうと指先を温めたり、メアンと同様に腕を抱えだす者も現れ出した。

「む、無駄な事を！ 氷なんぞに閉じこもった、異色野郎が勝てるわけがねえだろうが！」

その異変は敵対していた親玉も例外ではなく、持っていた長銃を握る指も徐々に悴(かじか)みだすのを感じていた。無論それを行ったのが誰なのかは彼には解っており、異様な変化を目の当たり

にした時から距離を取っているのは変わらず、今度は何が起こるのかと身構える事しか出来なかった。敵と味方それぞれに変化を与え、辺りに急速な領域の変化を与えた超常現象。その正体は、いったい何なのか。

相手が考え思考回路を巡っていた、そんな時だ。

《そんな事。決まったかのように言うようじゃ、駄目なんだろうぜ。一生な。》

「何……………」

氷の中に閉じ込められている青年の声色と思える声が、辺りに響き出した。声を耳にした存在達は一斉に彼の居る場へと向けると、眼を閉じていたはずの彼の瞳が何時の間にか開かれており、体制が徐々に地面に足が付く状態へと変わりだしていたのだ。

怪我をしていたはずの痛さを感じていないのか、表情には苦痛の色が見えない。

《なめんなよ……………！ 諦められるほど、賭けてきた気合は半端もんじゃねえんだ！！》

「貴様……………」

《意地でも立ち続けて見せる……………！！ もう俺は、独りじゃねえんだあああ！！》

パキンッ！！

ガラガラガラガラ……………！！

彼がそう叫んだ瞬間、閉じ込めていた氷に一斉に亀裂が走り、瞬時に崩壊し床へと転がりだした。氷の中に現れたのは先ほどまで戦っていた彼ではあったものの、井出達はずい先ほどまでの物とはうって違うモノへと変化していたのだ。

軽装備で動き安い服装を好んでいた彼が身に纏っていたのは、蒼く丈の長い袖無しのコートを銀縁のブーツ。太腿の太い彼の足をしっかりと包み込むふくよかなズボンを履き、凛々しい顔立ちで立つ、ビーストでありフォースを志願した金髪の青年。そんな彼の傍には、フィルスターでもリログーンでもない、一匹の蛇竜の姿があった。

「！！」

「ドラゴン！？」

一同が眼にしたのは、紛れもないドラゴンの姿。身体一面が氷で創られたかのような光沢を発する鱗を持つ、とても大きなドラゴンだった。

「何だ、このテクニックは……！ 俺は、知らないぞ！！」

「当然さ。俺等は知らない、計り知れない未知数を秘めた物だからな……………」

「未知の魔法……だと……！？」

「もう俺は、誰も傷つけさせやしない。そのための力だからこそ、どう思われようとも気にしねえ！！ 引かれようと、関係ねえ！！」

シュンッ！！

を取り巻く様に絡めた。すると氷の成長する速度が一斉に早まり、あっという間に彼の身体を氷が包み込みだした。

【汝は私の恐れを逃れる。だが彼(か)の者は恐れを受け入れ、自らの意志で立ち続けた。彼の者に抱かれし思いの前に、果てるが良い！！】

「ぐわあああああ！！！」

完全に身体が動かず氷の中へと閉じ込められてしまった相手は叫び声を上げ、氷竜の餌食となった。その時。

パキンッ！！

ガランガランガラン……………！！

一声に氷の束縛が弾けると同時に敵は宙を舞い、砕けた氷の塊と共にホールへと落下した。弾けると同時に周囲の気候も即座に元に戻り、肌寒さを感じない過ごしやすい温度へと戻った。

「凄い……………！ コレが……………！」

「主の求めた、究極のテクニック！！」

敵を仕留めたと同時に氷竜はギラムの元へと戻り、身体を氷の粒子へと変えて消え去った。同時に彼は氷竜の撤退と同時に長杖を左手に持ち替え、右手に短杖を手にしテクニックを演唱した。

右手に握られているのは、彼が愛用する短杖『コメツタラック』だった。

「安息の輝き…………… レスタ！！」

短杖から放たれたテクニックは周囲に幾多の光を放ち、皆の傷を次々と癒し出して行った。即効とまでは行かないが、皆の傷口はみるみる内に消えて行き、疲労感以外は感じない程にまで回復させてしまった。

事態が終息し敵に動きがない事を確認すると、ギラムは短杖を降ろし、口を開きこう言った。

「……………皆に、話しておきたい事があるんだ。今更になるかもしれないが、聞いてほしい。」

「……………」

「俺は…………… ……俺はビーストだが、皆を護ろうと思ってテクニックを磨いてきた一人の青年であり。フォースを志願したビーストだって言う事を……………改めて、ココに宣言するぜ。俺はテクニックを、使いこなせるようになりたかった。テクニックで、皆を護りたかったんだ。」
彼が言い放った衝撃的な事実を聞き、一同は絶句し驚き声を上げた。

俺が掴んだ夢の時

突如襲来を仕掛けてきた組織を見事打ち負かす事に成功し、連中全員がお縄になった頃。

「……いっつつっ！」

「ほら主、動くなって。病み上がりであんだけダメージ喰らったんだから、そんなくらいになるのは当然だろー？」

「ある程度は主自身のテクニックで何とかなってますが、やっぱり万全じゃない状態での戦闘は、今後は控えて下さい。」

「へーい。」

パートナーマシンナー二体と共に自室へと運ばれたギラムは、ベットの上で処置を受けていた。その日の戦闘は、彼を含む幾多の傭兵達のおかげで撤退させる事が出来たものの、親玉を一人で打ち負かしたに等しい彼の前身は傷だらけ。自身と相棒達の治療テクニックによって傷口そのものは塞げたが、やはり内面的に浸透した痛みだけはまだまだ直りそうには無かった。

とはいえ、元々の種族上で肉体が屈強な事もあって、ある程度は元気そうである。

「……しかし、やっぱり本職じゃない状態でのテクニックは精神的にも来るな。大半は『グラヴィディオン』と『ラギア』のおかげだが、久しぶりに応えたぜ。」

「まったくだ。主がアレを取り出した時、俺なんて鳥肌者だったんだからなー？ 俺等が外部に内密で見つけ出した長杖を、あんな大っぴらの所で使うんだからさ。」

「仕方ないだろ。ああでもしなけりゃ、俺がやられてたかもしれないし、社員の誰かが亡くなってたかもしれない。そんなのに比べたら、これくらい安いさ。」

「……主って結構、自分の事を安く見てないか？ んなに安くないぞー、主は。」

「え？」

前進の至る所に包帯が巻かれた主人を見て、フィルスターは少し不機嫌そうに言葉を放った。彼からの意外な言葉を聞いたギラムは少し驚くも、相手の顔を見て何を思っているのかそれとなく悟ろうとしていた。

「こんな事、今更言うのも難けどさ。主はリトルウィングの稼ぎ頭に数えられる一人の傭兵で、ビーストでもテクニックを得意とする立ち位置に君臨してる。それだけでも希少価値だって言うのに、いろいろ見合わない事に労力を払うのは、俺は嫌だ。」

「……どうしてだ？」

「だってそうだろ。主がナヴァルを探すために仕事を頑張ってきて来たなら、それはもう事が片付いた。主がこれ以上目立つ必要はほとんどねえし、前みたいな蔑視何てぜえーったい嫌だ。主はもっと、胸を張って何かするべきだ。今日みたいにな。」

「それに関しては、自分も同感です主。主が思ってるほど、主自身の事を小さく見てる人は周りには居ません。むしろ貴方の事を尊敬する人だって、中には居るんですから。そこだけは、自分

達の願いを聞き入れて下さいね。」

「…………… ……そっか。」

彼の言い分を聞いたりニログーンも同様に言葉を告げ、主人にそれとなく説教をしていた。普通であればマシナリーの彼等が主人へ説教をするなど言語道断であり、普通であればされる事のないやり取りと言っても良い。だが彼等の関係は上下関係はあれど礼儀等は左程気にしない中であり、気を付けて欲しい事などはストレートに言う事が多い。

主人を想い主人が立派だと思うからこそ、彼等は言いたかったのかもしれない。自分自身を過小評価する主人を、もっと大きな存在にしてみたい。胸を張れるほどの行いを、大衆の前でしたと言う事を。

「……なんだか意外だな。お前等は俺の事をいろいろ知っても、俺の事を別の視点から心配してくれてる。確かに、今日の事は互いの考えの中でやった事でも、そこまで説教を受けるとは思っ
てなかったな…… ごめんな、心配かけて。」

「ん、んなに心配してねえってっ！ ってか、しおらしく言うなしっ！ 主らしくねえっ！！」

「言ってるつもりはねえんだけどな。」

そんな相棒達の本音を聞いたギラムは少し反省しつつ、二人が心配してくれている事を改めて理解していた。あからさまに真意を突かれ、赤くなりながら反論するフィルスター 冷静になりながらも、照れている事を隠そうと左手で口元を隠すりニログーン

優しくもあり素直な彼等が、ギラムは大好きなのだと心の中で呟いた。そんな時だ。

ピピピッ ピピピッ

「？ 主、取り込み中すみません。」

両手を上げ主人の膝を軽く殴っているフィルスターの隣で、通信機が音を立てた。呼び出し音がなっているのはリニログーンの端末であり、彼は冷静に端末を弄り誰からの連絡であるかを確認し、声をかけた。

「ん、どうしたリニロ。」

「名義上の自分の主が起きたので、自分はそろそろ失礼します。後の事は、フィルに任せてもらってもいいですか？」

「ああ、良いぜ。今日はありがとな、リニロ。」

「いいえ、とんでもないです。では。」

どうやら彼の名義上の主人が起床した事を告げるアラームだった様子で、彼はその場を後にする事を告げ部屋を後にした。丁寧にお辞儀をして外へと向かうところが彼らしく、内心が幼いフィルスターとはえらい違いである。移動出来ない身体の為その場からの見送りをした後、ギラムは端末を弄り部屋の扉を閉めた。

「……………で、お前は何時まで不貞腐れてるんだ？」

「ふ、不貞腐れてねえしっ……………んなんじゃねえよっ」

「？」

相棒の一人が部屋を後にしたのを見届けた後、ギラムは視線を降ろし膝元にすがり付くもう一人の相棒に声をかけた。照れ隠しで殴っていた拳はいつの間にか主人の太腿の上に置かれており、体制も前のめりになり軽く不貞腐れている様にも見える。

だが、どうやらそういうわけでは無いらしい。

「……………俺は……………主が主の事を、もっと誇りに思って欲しいだけだ。俺からしたら、ギラムは俺のたった一人の誇れる主。ただのパートナーマシナリーの分際で言える事じゃねえけど、俺はもっと……………主には勇ましく居て欲しいんだ。」

「……………」

「へ、変な意味じゃねえからなっ……………別に……………前の……………」

『……………あつ。』

徐々に声量が小さくなりながらも、フィルスターはそう告げ膝元から離れようとはしなかった。大好きで誇れる主人が怪我をして、病み上がりの状態で戦いの中へと赴いた意志。周りから何と云われようとも自身を磨き、己の力を否定されようと立ち向かった勇氣。本来ならば適性が薄いとされるテクニックを使って、敵一群を丸々片づけてしまった力量。どれをとっても立派に仕事をこなす稼ぎ頭の主人が、彼は心底心配だったのだろう。主人と共に行動を共にすると言い張ったのは、ある意味では自身の不安な気持ちを吹き飛ばしたい一心だったのかもしれない。そんな不安を何度も何度も感じさせられる場面に直面しても、彼は絶対に主人を信じて夢を見届けていた。

本来ならば駆け寄りたかった気持ちを、抑えてまでそうしたのだ。そう言う点から見れば、確かに現状は頷ける要素に溢れているのかもしれない。完全なるツンデレだ。

「フィル、お前さ。」

「ん？」

「もしかしてだが、配属当初の事を後ろめたく思ってるのか？」

「うっ……………」

だが、実際には少し違った様だ。フィルスターの話を聞いていたギラムは、彼がそうする理由に見当が付いた様子で言葉を放った。

すると、あからさまに真意を突かれた顔を見せる相棒が居た。

「……………馬っ鹿だなあ、お前。何今更んな事気にしてるんだよ。」

「い、今更って何だよ！！ お、俺からしたら一大事な事なんだぞっ！！ 配属されたからって主の事を見下してたのに、今じゃそんな事さえも馬鹿馬鹿しいくらいに主がカッコいいから、誇ってもらわないと困るって言ってんだよ！！ ビーストでテクニックを使いこなして、あんな大芸当見せられるの主しかいねえんだぞ！！ 誇ってくれよ！！ 胸張れよ！！ 筋肉あるんだから！！」

「筋肉は関係ないだろ。」

段々と彼が哀れにも思える言い訳を口にしだし、ギラムは軽く呆れながらも彼を視つつ苦笑した。それを見たフィルスターは再び不貞腐れ、彼の太腿の中に顔を埋め隠していた。

「まあでも、確かにフィルの言い分はもっともだ。長杖の力もあるとはいえ、俺は敵軍の親玉と集団を片づけちゃったに等しい。顔馴染みの連中からは賞賛や説教も飛んできたが、俺はもう昔の事は負目にしないぜ。フィルやリニロが受け入れてくれたように、これからはもっと俺らしくしないとな。」

「お、おうっ！ それでこそ主だっ」

「はいはい。」

そんな彼に助け船を出そうと、ギラムは改めて自分の夢を大切にしようと言葉にした。信じ続け、変えたいと願い、行ってきた事を認めてくれる相棒が居る。そんな相棒がずっと昔に感じていた事を今になって悔んでいる所を視れば、当然ながら恥じない様行きたいと願うのかもしれない。大切な家族の一人として、ギラムはフィルスターを見ているのかもしれない。素直なのか素直じゃないのか解らない、不真面目で妬きもちを抱く相棒を。

「……そいやさ、主。」

「ん？」

「あの『ラギア』って、誰なんだ？ 拾った時からだが、名前なんて知らないぞ。」

そんな相棒に対し苦笑をしていると、フィルスターは不意に思い出したかのように質問を投げかけた。彼の気にしていた事、それはつい先ほど光臨した大きな氷竜の事であり、彼が名を叫んだことに疑問を抱いていた様だ。名前がある事以前に、指揮を取れるほど聞き分けの良い存在だったのか、いろいろと謎が付きにくい相手なのだろう。

超常現象の中にある、疑問の塊なのかもしれない。

「まあ、正確には俺も理解してないんだが…… 長杖の力と、俺の事を見守ってくれた見知らぬ龍が合わさった存在かもな。」

「見知らぬ龍……？ それってもしかして、『守護龍(しゅごりゅう)』って奴か？」

「かもな。俺には視えないから、良く分からないけどさ。」

「ふーん、そっか。……でも、主のそばにはドラゴンは居るし。あながち間違いじゃねっかもな。」

「だな。」

しかしそんな名を叫んだ張本人ですら、あまり相手の事を理解出来ている訳ではない様だ。名付けをしたのは確かにギラム本人だが、何かを考えてそう名づけたわけでは無い。彼が直感でそう叫んだと同時に行動を開始し、相手を仕留めたと同時に自身の元へと戻り、姿を消した。

そんな謎の龍に対して、彼は相手の事を『守護龍』と考えている様だった。自身を見守り続け、試練と共に達成を見届けてくれる存在だと。

「……」

「……まあでも、俺はこれからも主と一緒に居たいな。良いか、主。……？ 主？」

「ぐうーっ…………… すうー……………」

その後いろいろと言葉を交わしていると、不意に相手からの返事が途絶えた事にフィルスターは気付いた。

顔を付けていた主人の腿から顔を上げると、目の前には疲れ果て寝息を立てる主人の姿があった。どうやら精神的に疲れていたのは本当らしく、少しばかりではあるが彼の会話に返事を返していたのかもしれない。

『寝てやがる…………… ……まっ、無理もねっか。久々にあんなでっけえテクニク放ったんだ。むしろ疲れてなかったら、精力を疑うけどな。』

屈強な戦士とも言える種族の彼が疲れてしまった事を知ると、彼はその場から移動し近くにあったタオルケットを彼の上へと掛けた。優しく丁寧に身体の上へ掛けると、彼は数回主人の額を撫で、こう呟いた。

「お疲れ様、ギラム。」

寝てしまった主人に対し、彼は誠心誠意の言葉を彼に告げるのだった。

— E P I S O D E E N D —